Journal of Asian and African Studies, No. 42, 1991

トルグート部の発展
——17～18世紀中央ユーラシアの遊牧王権——

宮　脇　淳　子
アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

The Central Eurasian Nomadic Kingship In the Seventeenth and Eighteenth Centuries: The Case of the Torguts

MIYAWAKI, Junko
(Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa)

Questions concerning the nature and structure of the kingship among the nomadic peoples on the Central Eurasian steppes have remained largely unanswered because of the scarcity of their own written records, with an exception of genealogy, and the inevitable bias against them inherent in the historical materials produced by the sedentary civilizations which greatly suffered from their depredations. Modern scholarship in China and Russia in particular, for obvious political reasons, presents a highly distorted historical picture of the nomads, who had very much to do in the evolutionary process of their nations.

Presented here is a case study of the kingship among the Torguts, who are more commonly known as the Volga Kalmyks. Always a member in the Four Oyirad tribal federation, the tribe was highly active all over Central Asia and Eastern Europe for almost two centuries, 1606–1771. Their activity deeply affected international politics played among the Jöchid khanates in the area, the Russians, the Osmans, the Lithuanians-Poles and the Swedes. All the while, however, they maintained close-knit marital alliances with other Oyirad brethren such as the Dzungars and the Khoshuts to their east. Their religious ties with Lhasa, the center of Tibetan Buddhism, were especially strong, so much so that their first khan Ayuuki received his title from the Dalai Lama regime directly after the crushing defeat at Juun Modu in 1696 of Galdan, a Dzungar chief who was khan of the Four Oyirad.

Ubashi Khan, a great-grandson of Ayuuki, left the Volga steppe and returned to the old pastures on the Ili with his Torgut tribesmen in 1771. His decision to seek protection under Emperor Ch'ien-lung rather than Catherine the Great effectively established the legitimacy of the Manchu emperorship inherited ultimately from the Mongol Empire of Chinggis Khan. At least it was the way the Manchu emperor felt at that time.

はじめに——研究状況の概観

中央ユーラシア草原は，歴史叙述が始まった最初から，遊牧騎馬民の活躍舞台であった。ヘロドトスの『歴史』（紀元前5世紀）に伝えられた黒海北岸のスキュタイや，司馬遷の『史記』（紀元前100年頃）に伝えられた，モンゴル高原に最初の遊牧帝国を建設した匈奴以来，19世紀に至るまで，中央ユーラシア草原ではさまざまな遊牧王権が消長を繰り返した。しかし，遊牧国家あるいは遊牧王権が，どのような仕組みで成り立っていたのかについては，かれら自身が残した記録があまりに少ないため，研究の進展ははかばかしくなく，今だに学界の大きな課題として残されている。

中央ユーラシア草原に建設された最大・最強の遊牧国家は，言うまでもなく13世紀初めにチンギス・ハーンが建てたモンゴル帝国である。モンゴル帝国は，中央ユーラシアの遊牧民すべてを統合し，さらに，中央ユーラシアの外縁に位置する定住農耕地帯をも支配下に入れた。モンゴル帝国については，被支配地域のさまざまな言語で書かれた記録が残っているが，モンゴル人自身の残した記録は，やはりほとんどない。

14世紀半ばに，モンゴル帝国の継承国家は，中国やイランなどの植民地を失い，チンギス・ハーンの男系子孫を首長に戴く多くの地方政権に分裂した。これら遊牧民は，自らの存在を正当化するための歴史を書こうとはしなかったので，系譜以外の記録はほとんど残存しない。これに反して，かつてモンゴルの支配を受けた農耕地帯の人々は，自分たちの好みに従って，歴史を叙述することができた。こうして被支配者の立場から解釈した歴史が普及して，今日に至っている。そのような歴史書によると，モンゴル帝国「崩壊」後の中央ユーラシア草原は，全く暗黒の時代であったように見える。

17世紀になると，中央ユーラシア草原のかつてのモンゴル帝国の東端と西端に，全く新しいタイプの国家，満洲族の清朝とロマノフ朝ロシアが誕生した。この二つの帝国は，それぞれ東と西から次第にモンゴル帝国の後裔たちの遊牧政権を征服し，19世紀には，中央ユーラシアはこの二大帝国の支配下に完全に分割された。20世紀に至り，モンゴル人民共和国を除く清朝のすべての旧領を中華人民共和国が継承し，帝政ロシアが征服したすべての領土をソ連が継承した。この両者はともに社会主義国であるが故に，歴史は国家の利益に奉仕すべきものとし，自分たちの記録を持たない遊牧民の歴史を抑圧したため，多くの史実が埋れたまま，今日に至っている。

しかし，遊牧民の歴史の実像を解明することは，まったく不可能なことではない。中国やロシアの御用史家の編纂史料にも史実は含まれている。厳しい検閲を受けて刊行された外交文書からでも，事実の断片を見つけだすことができる。いろいろな言語で書かれた，相互に矛盾する史料を比較することも可能である。また，遊牧民自らが残した祖先の系譜や伝承を利用できる幸運な民族も存在する。ただその場合でも，現在大国の支配下で少数民族の立場に甘んじなければならないかれら自身には，自由な研究は許されていない。

筆者はこれまで，モンゴル帝国「崩壊」後の帝国の東半分の後裔たち，すなわち，現在モンゴル系の言語を話す人々として分類される，新たに構成されたモンゴル民族と，これに対抗したオイラット部族連合の歴史を研究してきた。その過程で，ロシア人研究者の手になる中央ユーラシア遊牧民の歴史が，いかに欺瞞に満ちているかが明らかになった。これは筆者の専門とする，17～18世紀のジューン・ガル史のことを指しているのであるが，後に述べるように，ロシア人によるカザンやクリミアの遊牧王権の歴史の研究も，同じく真実から遠いことが，近年，欧米の研究者によって明らかにされてきている。

本論で扱うトルグート部族は，ジューン・ガルと同様，オイラット部族連合を構成する

一集団であった。かれらは1630年にヴォルガ河付近に移住し，1771年にジューン・ガルが滅ぼされたあとのイリに帰還した。トルグート部はジューン・ガルの圧迫を受けてヴォルガに移住したという従来の定説が誤りであることを，ここでは明らかにするつもりである。また，これまでほとんど知られていなかったヴォルガ移住後のトルグートとロシアとの関係について，ウクライナ生まれで，アメリカ・シカゴ大学でPh.D.を取得した，マイケル・ホダルコフスキーMichael Khodarkovsky の最近の論文二篇を紹介しながら概説することにしたい。そして，トルグートのイリ帰還については，清の乾隆帝の興奮を生々しく伝える自作の文章を，満洲語原文から訳出してみよう。本論は，わが国では初めての，トルグート部族の通史である。

17世紀末～18世紀中葉に中央ユーラシア草原の覇権を握り，「最後の遊牧帝国」とまで呼ばれるジューン・ガル王権の実体は，未だ解明されていない。ジューン・ガルのライヴァル部族であったトルグート部の中央ユーラシア草原往復移住の歴史を辿ることは，当時の遊牧王権の解明に不可缺である。また，本論が，過去の，あるいは異なった地域の遊牧王権の解明に僅かなりとも貢献できれば，筆者の望外の喜びである。

第一章　モンゴル帝国の構造

13世紀のモンゴル帝国期を境にして，中央ユーラシア史は時代区分される。モンゴル帝国時代に，中央ユーラシア草原の遊牧民はすべてモンゴルに統合されて，それまでの，突厥やウイグルなどの時代の記憶を失った。あるいは，それ以前から自分の部族に伝わる伝承を，チンギス・ハーンとの関係を基準に再整理した。旧ソ連領中央アジアに住むカザフやウズベク，キルギズ，トルクメン，タジク，ロシア連邦のチュヴァシュ，タタル，ブリヤート，カルムィクや，中国領のウイグル等々は，名称こそモンゴル帝国時代以前から知られるものもあるが，その実体は，モンゴル帝国時代以降に再編成された集団である。カザフやウズベクなどは，14～15世紀に，チンギス・ハーンの男系子孫を核として全く新たに形成された民族である。しかし，ソ連の研究では，各民族の歴史におけるモンゴルとチンギス・ハーン一族の影響を，極力薄めるか，ほとんど無視しようとしている。

本論で扱うトルグート部族も，その伝承や系譜は，チンギス・ハーンの同時代までしか遡ることはできない。そして，知られている限りでは20世紀初頭まで，かれらはチンギス・ハーンにつながる一族の系譜を大切に保持していた[1)]。17～18世紀の最盛期のかれらの行動も，モンゴル帝国時代の栄光の記憶に支えられていたと言ってよい。

モンゴル帝国時代以降の中央ユーラシアの遊牧王権は，すべてチンギス・ハーンの王権に由来するものであった。また，その後の遊牧社会の支配構造や，王位継承争いなどは，モンゴル帝国時代に起こったそれらと，原則的には同じである。そこでまず，そうした遊牧王権の原点である，モンゴル帝国の仕組みを概観しよう[2)]。

1）1903年，故ラムシュテットG.J. Ramstedtがアストラハンの近くのチェルヴレンナヤTšervlennajaの地で採集したヴォルガ・カルムィクの系譜は，トルグート部の始祖をチンギス・ハーンとし，20世代278名の王公の名を記載する。併せて，ドルベト部の13世代45名の王公の名も記載する。この未発表のヴォルガ・カルムィクの系譜の研究を，筆者はフィン・ウゴル学会会長ペンティ・アアルトPentti Aalto氏から託された。系譜の転写に加えて，本系譜と，東西に残る五種類の代表的なカルムィク（オイラット）の系譜を比較参照した拙論“A Volga-Kalmyk Family Tree in the Ramstedt Collection”は，『フィン・ウゴル学会報』*Journal de la Socéte Finno-Ougrienne* 83号に掲載予定である。筆者はこの論文の中でカルムィク史を概説したが，それが本論執筆の動機となった。

2）以下，第一章は，注記箇所以外は，宮脇　1990に拠る。

1　モンゴル帝国の組織

1206年の春，モンゴル高原の東北部オノン河源の地で，遊牧部族の代表者たちの大集会（クリルタイ）が開かれた。この大集会で，モンゴル部族の一氏族長の息子に生まれたテムジンは，かれの軍門に降った遊牧部族長たちから，最高指導者に選挙された。テムジンの義兄弟の巫術師（シャマン）が，チンギス・ハーンという称号を選んで，かれに授けた。

チンギス・ハーンは，大集会のメンバーである各有力部族長，氏族長を，古くから遊牧社会に存在した階級制度に従って，万戸長，千戸長，百戸長などに任命した。この万戸長，千戸長などの位は，身分あるいは宮中席次と考えられる。チンギス・ハーンは，モンゴル帝国内の遊牧諸部族すべてを解体し，その構成員を千戸，百戸に再編成したのではなく，もともとあった遊牧集団に，千戸や百戸などの格付けを与えたのである。

ラシード・ウッ・ディーン著『集史』は言う。チンギス・ハーンが1227年に他界した時，かれの軍は129の千戸（千人隊）から成っていた。かれがこの中から末子のトルイに与えた101の千戸は，中軍，右翼，左翼の三軍に分かれていた。中軍は１千戸より成り，チンギス・ハーン個人に属する軍隊で，その親衛隊であった。チンギス・ハーンの養子のタングト族出身のチャガン・ノヤンがこれを指揮したが，チャガン自身はこの親衛隊の第一番目の百戸長であった。右翼は38の千戸から成り，アルラト族出身のボオルチュ・ノヤンの統率を受けたが，ボオルチュは自分自身の千戸を持っていた。左翼は62の千戸から成り，ジャライル族出身のムハリの統率を受けた。ムハリは，左翼万戸長であると同時に，自分の部族であるジャライル３千戸の長でもあった。その他多くの将軍もまた，その種族出身の軍隊を指揮しており，オイラットのクトカ・ベキはオイラット４千戸の将で，タリタイはその出自氏族であるバアリン10千戸を統率した。アラクシュ・テギンは４千戸のオングトの指揮権を保持し，チンギス・ハーンの中国侵入のとき降伏した契丹人ウヤルは一万の契丹部隊を，女真人トガンは一万の女真部隊の指揮権をそれぞれ保持し続けたという[3)]。

各遊牧集団を格付けした千戸という単位は，戦時に千人の兵力を供出できる集団のことであるが，その内情はさまざまであったに違いない。各千戸長も身分は同じでも，率いる兵力はそれぞれ異なっていた。しかし，モンゴル軍が征服戦争にでかける前には，必ず大集会が開催され，ここで軍の編成に関する事項が定められたが，徴発する兵士の数は，例えば各千戸につき何人というふうに割り当てられた。決められた数の兵力を供出した各千戸は，それに見合った戦利品を報酬として分配される権利を有した。千戸や百戸などの格付けは，株のようなものであったと考えればよい。そして，いずれの遠征にも，モンゴル高原の遊牧部族すべてから，一定の割合の兵士を率いた族長が参加したので，モンゴル帝国が地方政権に分裂した後，ユーラシア草原のどの地方にも，同じ部族名を持つ集団が存在することになったのである。

千戸長や百戸長などの遊牧集団の首長は，すべて自己の領民を持つ独立の領主であって，殿様（ノヤンあるいはアミール）と呼ばれた。チンギス・ハーンといえども，自己の所有下にある直轄の領民（ウルス）以外には，他の首長の領民に直接の支配を及ぼすことはできなかった。遊牧民の壮年男子は，全員が兵士になる定めであったが，その遊牧集団の首長になるためには，戦争の指揮に長け，掠奪品を公平に分配し，紛争の仲裁能力があると一族の成員から認められることが必要であった。遊牧民の指導者は，古い昔から「民（一族の成員である遊牧民）を養う」ことが要求され

3）ドーソン，.57－58頁。

たのである。

2　モンゴル帝国の版図と継承争い

チンギス・ハーンを最高指導者とするモンゴル帝国は，中央ユーラシア草原のすべての遊牧民を支配下にいれ，続いて定住農耕地帯に侵略した。1227年にチンギス・ハーンが死んだ時，モンゴル帝国の領域は東は大興安嶺を越えた東方の女直族の住地から，南は西夏（タングト）の旧領，西は中央アジアのホラズム王国の旧領に及んでいた。亡命中のホラズム王追撃の命を受けた二人の将軍，ジェベとスベエデイは，すでに北イランからカフカス地方を横断し，キプチャク草原に進撃してルーシの諸侯を破り，クリミア半島にまで侵入した。しかし，この時点ではまだモンゴルはこれらの地方を支配するには至っていない。

モンゴル帝国第二代のハーンとしては，チンギス・ハーンの生前の希望通り，第三子オゴデイが，長老や将軍たち全員の大集会で，正式に選挙された。チンギス・ハーンの長子ジョチはすでに亡く，次子チャガタイも末子トルイもオゴデイを支持したので，何の問題も起こらなかった。

1241年にオゴデイ・ハーンが死んだ時，オゴデイの后の一人でナイマン部族出身のトレゲネが摂政となり，次のハーンを選出する大集会を召集した。チンギス・ハーンの血を引く皇族の長老中，最有力者であったジョチの子バトゥは，この時ポーランドからハンガリーに遠征中であった。バトゥは，トレゲネをも，彼女が次のハーンに推すその子グユクをも好まなかったので，ヨーロッパ遠征から帰還しても，足の病を理由にヴォルガ河畔の自分の本拠地に留まり，大集会への出席を拒否した。

1246年になってようやく，バトゥ不在の大集会でオゴデイの子グユクが新ハーンに選ばれたが，かれは即位の二年後に世を去った。そこで，その后でメルキト部族出身のオグル・カイミシュが摂政となり，生前にオゴデイ・ハーンが最も寵愛した孫である，グユクの弟クチュの子シレムンを次のハーンに立てようとした。ところがバトゥは別に大集会を召集し，トルイの未亡人でケレイト部族のオン・ハーンの姪であるソルカクタニ・ベキと結んで，その長子モンケを次のハーンに指名した。

バトゥの召集した大集会に出席したのは，チンギス・ハーンの長子ジョチ，末子トルイ両家の諸王だけで，チャガタイ，オゴデイ両家は出席を拒否した。結局，1251年，ジョチ，トルイ両家は実力をもってモンケの選挙を強行し，即位したモンケ・ハーンはただちに，反対派を徹底的に弾圧した。それでもこの時は，モンゴル帝国はともかくもまとまりを保っていた。モンゴル帝国が，普通われわれが継承国家と呼ぶ「四ハーン国」に「分裂」するのは，1259年にモンケ・ハーンが他界した後である。

モンケ・ハーンの八年間に及ぶ治世の間にモンゴル帝国の中心となったのは，トルイの正夫人ソルカクタニ・ベキから生まれた四兄弟，モンケ，フビライ，フレグ，アリク・ブガであった。1259年秋，モンケ・ハーンが南宋に親征中，四川の合州の地で病死すると，翌1260年春，次弟フビライは内モンゴルの開平府で，同年夏，末弟アリク・ブガはカラコルムで，それぞれハーンに選挙された。

アリク・ブガの側には，故モンケ・ハーンの正后や息子たち，チャガタイ家の諸王が加わり，バトゥの後継者としてキプチャク草原に君臨していたその弟ベルケもかれを支持した。フビライの側には，左翼万戸の精鋭軍，チンギス・ハーンの諸弟の一族，漢人軍閥が加わった。フビライとアリク・ブガ両ハーン間の戦闘は，おおむねフビライ軍の勝利に終わり，華北から食糧の供給を受けられなくなったカラコルムは，非常な窮乏状態に陥った。飢餓に悩まされたアリク・ブガの軍隊は解体し，アリク・ブガは1264年にフビライに投降して，その二年後に死んだ。

このハーン位継承戦争が原因となって，モ

ンゴル帝国は，元朝，チャガタイ・ハーン国，キプチャク・ハーン国（黄金のオルド），イル・ハーン国の四つに分裂したと普通言われている。しかし，最新の研究では，これら四つは，モンゴル帝国の中では目だって大きなウルス（一般に「国」と訳されるが，モンゴル語の元来の意味は，国民＜くにたみ＞であり，国家ではない）であったが，その他にも，東方に封ぜられたチンギス・ハーンの諸弟の一族など，数多くのウルスがあったことが指摘されている。各ウルスは，それぞれ独自の軍隊，領民，貢税，牧地，時には近隣の都市に対する権利を持っていた[4]。

モンゴル帝国が1260年代に四ハーン国に分裂したという従来の説明は，正確ではない。モンゴル帝国は，最初から，チンギス・ハーンを最高指導者に戴く遊牧部族連合であった。チンギス・ハーンの死後も，各遊牧部族すなわちウルスの領主たちは，チンギス・ハーンの子孫を自らの君主に戴いたのであるが，子孫の数が増えるに従って，複数の君主が誕生することになり，全体としては益々ゆるやかな連合になっていった。ただ，征服地が拡大し続けた間は，ハーンの後継者たちの地位は安泰であり，モンゴル帝国は存在し続けたと言うことができる。

本章の最初で述べたように，大集会のメンバーである遊牧集団の首長は，すべて自己の領民を持つ独立の領主であった。そして，征服戦争の参加者には，掠奪品は公平に分配されるのがきまりであった。例えばオゴデイ・ハーンの時代に金が征服された時，華北の金の旧領は，耶律楚材の反対にもかかわらず，モンゴルの皇族や将軍たちに分地として賜与された。この結果，各州県はモザイク状に所有者が異なり，甚だしきは一都市の中で区画ごとに別個の行政権が施行されることまであったという[5]。

しかも，遊牧民は原則として均分相続をおこなった。君主の子孫の間でも，継承権は平等であり，次代の君主たるには，大集会の構成員にその実力を認められて選挙されることが必要であった。モンゴル帝国時代以後の遊牧民社会においては，チンギス・ハーンの子孫が自分たちのハーンに選ばれることには，誰も異存はなかったが，子孫のうちの誰をハーンに選ぶかについては，つねに利害が対立したのである。

1260年に筆を執った歴史家アラー・ウッ・ディーン・ジュワイニーは，チンギス・ハーンの子孫は当時約一万人を数えたと伝えている。モンゴル人の数は非常に少なかったために，被征服民族にすぐに同化されたと一般に言われているが，本論の最初に注意を喚起したように，これはモンゴルの支配を受けた農耕地帯で解釈し直された歴史叙述に，われわれが影響されているからである。例えば当時の漢地（南宋を除く）の人口は，約百十万戸（五百万人）とされている。中国の人口が一億を越えるのは，清の康熙の末年，18世紀初頭のことである。フビライ・ハーンが施行した戸口調査によると，チンギス・ハーンの弟のオッチギンとハチウンの後裔は，それぞれ六百人と七百人にのぼり，その軍隊の家族数も著しく増加していたことが知られたという[6]。モンゴル人の数は，従来考えられたより

4）Peter Jackson, "From *ulus* to khanate: the making of the Mongol states c.1220−1290." 1991年3月19日から21日までロンドン大学 SOAS で開催された，International Seminar "The Mongol Empire and Its Legacy" における口頭発表。研究会の概要は，岡田英弘「国際セミナー『モンゴル帝国とその遺産』」（AA 研『通信』第72号，1991年 7 月25日，54−59頁）を参照されたい。

5）ドーソン，110−111頁。

6）ドーソン，60頁。松田孝一「モンゴル帝国領漢地の戸口統計」『待兼山論叢』19，1985年，25−26頁。中国の人口の推移については，岡田英弘「康熙帝・雍正帝・乾隆帝」（『人物中国の歴史 9　激動の近代中国』集英社，1982年），187−188頁を見よ。

はるかに多かったとするべきである。

遊牧帝国の領域が拡大し続ける間は，戦争の指揮をとるハーンの直轄地も拡大し，分配すべき掠奪品の収入もあるからハーンの権力は大きいが，征服すべき隣国がなくなると，ハーン個人の経営はたちまち窮乏化する。しかも世代を経るごとに，均分相続によって私領は減少するので，今度は帝国の支配層の内部で抗争が始まる。兄弟が親の遺産相続をめぐって争うのは，遊牧民の常であった。古来，大遊牧帝国が，時として有能な指導者の死後一朝にして瓦解したのは，このような理由による。被征服民の反乱はこの隙に乗じたものにすぎない。

13世紀初めに誕生したモンゴル帝国は，初代の君主チンギス・ハーンの孫の代には継承争いによって複数の君主が並立し，14世紀半ばには農耕地帯の征服地を失ってさらに多くの地方政権に分裂した。しかし，かつてのモンゴル帝国の領域に生きる遊牧民の社会では，その後もかれらの王権の源泉として，チンギス・ハーンの名前が忘れられることはなかった。モンゴル帝国時代が，中央ユーラシア史の時代を大きく区分するのは，そのためである。

次章では，本論の主役トルグート部族が17～18世紀に関係することになった，その他のモンゴル帝国の後裔たちについて概観する。

第二章　モンゴル帝国「崩壊」後の中央ユーラシア草原

1　元朝と新たなモンゴル

チンギス・ハーンの末子トルイの子フビライのウルスは，中国では元朝と呼ばれ，中国歴代王朝の一つに数えられる。しかし，元朝の統治の仕組みは，ここでは述べないが，遊牧国家の伝統を大いに受け継いだものであった。元朝の支配はモンゴル本土にも及んでいたが，アルタイ地方や中央アジアに遊牧する部族については，詳細は明らかではない。

1368年，朱元璋が，大明皇帝の位について元の大都を攻撃すると，元朝皇帝は内モンゴルに脱出した。中国史の立場では，元朝はここで滅亡したことになっているが，フビライ家はその後もモンゴル高原を支配した。1388年，フビライ家の最後のハーンは，オイラット部族に支持されたアリク・ブガの子孫に殺され，フビライ家は断絶する。この後モンゴル高原の実権は，後に詳述するオイラット部族連合に移った。やがて15世紀末に，混乱した時代を生き延びた唯一のチンギス・ハーンの男系子孫と言われるダヤン・ハーンが即位すると，元朝にゆかりのある部族が再び連合して，新しいモンゴル民族が生まれた。かれらが，現在モンゴル人と呼ばれる人々の直接の祖先である。

ダヤン・ハーンの数多くの子孫の中で，嫡流のチャハル部長リンダン・ハーンは，1634年にチベット遠征の途上，甘粛の草原で病死し，その遺児が満洲族の後金に降って，元の皇帝の玉璽を献上した。これで北元時代は終わった。内モンゴル諸部の王公たちは，そのほとんどがダヤン・ハーンの子孫，すなわちチンギス・ハーンの子孫であったが，かれらは異族である満洲族のハーンを，自分たちのハーンに推戴した。かくして元朝の正統を継承した後金は，1636年大清と改称して皇帝の称号を採用し，モンゴル人と同盟して中国の支配に乗り出した。外モンゴル諸部の王公は，1691年に清朝皇帝の臣下となった。

2　チャガタイ・ウルスの後裔

トルイ家の末弟フレグの建てたイル・ハーン家の後裔たちは，17世紀のトルグート部族には直接関係がないので，省略する。

チンギス・ハーンの次子チャガタイのウルスは，ジョチ家のウルスの南方にあり，バルハシ湖に注ぐイリ河からアム河に至る草原に遊牧した。サマルカンドやブハラといった定住地帯は，大ハーンの直轄地であったと言われるが，征服戦争の参加者に分地として賜与された漢地と同じく，これらの地帯でも一族

の各家がそれぞれ収入の配分を受けていたと思われる。

モンゴル帝国第二代ハーン・オゴデイの孫ハイドゥは，1269年タラス河畔て大集会を開き，ジョチ，チャガタイ両家の諸侯によって中央アジアの大ハーンに推戴された。ハイドゥは，チャガタイ家の当主ドワの部民を併せ，1301年のその死まで，ほとんど毎年元朝と戦い続けた。ハイドゥの死後，ようやくドワは旧領を回復し，元朝と和議を結んだ。この間にチャガタイ家の所領は，アフガニスタンからインド北部，東では旧ウイグル領にまで広がった。

14世紀ドワの死後，諸子の間に遊牧派と定住派の分裂が起こった。東部ハーン家は，イリ渓谷に幕営を置き，天山地方を勢力範囲として伝統的な遊牧生活を固守した。かれらを別名モグリスタン・ハーン家と呼ぶ。この東チャガタイ・ハーン国は15世紀前半再び分裂して，イリ地方からタシケントに至る本土と，天山東部の旧ウイグル領とに分かれた。その後裔たちは，本論の主人公オイラット諸部の攻撃にさらされ，17世紀末にはほとんどがジュール・ガル部に征服された。

西部ハーン家は，西トルキスタンの定住地帯に根拠を移し，イスラムを保護し都市文明を享受した。チャガタイ家のハーンの権力は早くに没落し，政権を争ったモンゴル諸部の領主（アミール）たちの内，バルラス部族出身のティムールが1370年に西トルキスタンの支配権を握った。ティムールは三十年の在位の間に，東は天山から西は小アジア，北はヴォルガ河下流域から南はインドのデリーに及ぶまで，大いに征服戦争を行ない，西トルキスタンの旧チャガタイ領とイランの旧イル・ハーン領を統合した大帝国の君主となった。

ティムールの五世の孫バーブルは，北方の草原より南下したウズベク族に追われてインドに走り，ムガル朝の始祖となった。この後19世紀末にロシアに征服されるまで，西トルキスタンを支配したウズベク族は，チンギス・ハーンの長子ジョチの後裔をハーンに戴く，新たに形成された民族であった[7)]。

3　ジョチ・ウルスと黄金のオルド

チンギス・ハーンの長子ジョチ家の領土は，キプチャク・ハーン国と俗称されるが，実際には前述の如く，やはり独立したいくつものウルスから成っていた。その中で最大のウルスが，ジョチの次子バトゥがヴォルガ河畔に建設した黄金のオルド（帳殿，大テント）であった。ロシア語でゾロタヤ・オルダという。サライ市を首都としたという通説は正確ではなく，バトゥ自身は，その名の通りの黄金のオルドを住居として，ヴォルガ河畔を移動して暮らした。サライは，黄金のオルドに物資を供給する商業・貿易の一大センターであったのである。これは，モンゴル帝国の「首都」と呼ばれるカラコルムも同様である。

バトゥの黄金のオルドに対して，東方の，バルハシ湖とアラル海にはさまれた草原を根拠地とするバトゥの兄オルダの一族は，白いオルド（アク・オルド）と呼ばれた。ジョチの息子たちは，オルダ，バトゥの他，ベルケ，シバン，ボアル，トカ・テムルの名がよく知られる。ベルケはバトゥの息子たちの死後，黄金のオルドの君主となった。シバンは，14世紀後半アラル海北方の草原に勃興した，ウズベク族のシャイバン朝の始祖と言われる。

ジョチ家のウルスは，ホラズムのオアシスとロシアの森林地帯を除いて，その大部分が草原であった。黄金のオルドについてはかなりの史料が残存するが，その他の，草原の遊牧民に君臨したジョチの後裔については，系譜が伝わるだけであり，それも混乱の時代には断片的にしかわからない。

1266年に死んだバトゥの弟ベルケには息子

7）第二章のここまでの概説は，佐口透「モンゴル帝国とティムール帝国」「カザーフ族とウズベク族の国家」（『世界各国史16　中央アジア史』山川出版社，1987年）及び宮脇　1990に拠る。

がなかった。この時黄金のオルドで最も有力であったのは，ベルケの部下の将軍で，イル・ハーン家のフレグとの戦争の司令官でもあったノガイであった。大集会はバトゥの孫をハーンに選んだが，黄金のオルドの実質上の支配者はノガイであった。ノガイは四十年もの間黄金のオルドの政治に一大権力をふるい，自分のマングト部族を基礎とする特別の領地を，クリミア半島につくった。このノガイが，17世紀にトルグート部族が西方に移住した時，ヴォルガ河付近に勢力があったノガイ部族の祖である。

黄金のオルドの歴史は，18世紀末以来，カラムジンのようなロシアの御用史家の手によって，ロシア史の一部として否定的に研究され，あるいは故意に歪曲して解釈されてきた[8]。ロンドン大学スラヴ東欧学部（School of Slavonic and East European Studies, University of London）のレスリー・コリンズ Leslie Collins 博士は，ロシア人が初めて「タタルのくびき」をはねかえしたとされる，ロシア史では有名な1380年のクリコヴォの戦いの実在性に疑問を呈している。

ここで言うタタルとは，13世紀以来，ロシア人を初めとするヨーロッパ人がモンゴル人を呼んだ名称であり，タタルはモンゴルと同義である。タタル人をトルコ系と分類するのは，言語だけに基づくもので，系譜の上ではモンゴル系であることには一点の疑いもない。

さて，1380年の戦いについては，ロシア正教の大司教の書いた年代記は，モスクワ大公ドミトリー・ドンスコイの，ママイに対する大勝利を口をきわめて賞賛しているが，同時代の一次史料である外交文書類には，この戦いについて何の言及もないという[9]。実際は，次の如くであった。

この頃，黄金のオルドではハーン位継承争いが起こっており，ハーンではないママイが実権を握っていた。ママイはついには自らハーンとなったが，すでにトランス・オクシアナとホラズムの支配者となっていたティムールの支援をうけた，ジョチの後裔トクタミシュ（ジョチの末子トカ・ティムルの子孫と言われる）が，東方から来攻して，1378年にアストラハンとサライを取った。トクタミシュは1381年にカルカ河でママイ軍を撃破して，黄金のオルドのハーンとなったのである。トクタミシュはその後，モスクワに向い，ママイに勝利したという前述のドミトリー公と，公妃と大司教はモスクワから脱走した。トクタミシュは1382年にはモスクワを占領し，モスクワ公国各地を荒らして引き揚げた。

トクタミシュはこの後，ティムールと衝突し，1395年にはカフカスでティムールに粉砕された。ティムールはヴォルガ河下流域を荒らし，リャザンに入り，アストラハン，サライ，ブルガル，クリミア半島を荒廃させた。

15世紀に入ると，黄金のオルドはいくつもの独立のオルドに分かれ始めた。大オルドの他，クリム（クリミア半島とウクライナ草原を含む）やカザンやアストラハンをそれぞれ根拠地とするジョチの後裔たちの宗主権争いが，絶え間なく起こった。その間も，ジョチの後裔たちはモスクワやポーランド・リトアニアを攻めたので，モスクワ大公たちは，そのたびに，当面の敵と対抗しているオルドと同盟を結んだのである[10]。

ロシア史の定説では，ジョチの後裔の大オルドは，1502年，いわゆる「クリム・タタル」のメングリ・ギライ Mengli Girai によ

8）山内昌之『ラディカル・ヒストリー』（中公新書，1991年）中の序章と第一章は，このようなロシア史学の嘘を，アメリカの学者たちの研究を紹介しながら，ムスリム少数民族の立場から告発する。

9）L.J.D.Collins, *The Fall of Shaikh Ahmed Khan*, Ph.D. thesis, University of London, 1970. 著者に聞いたところでは，本書は，さまざまな妨害を受けて，未だに刊行されていない。

10）黄金のオルド史の概説としては，日本語では，古いがヤクボフスキー・グレコフ共著・播磨楢吉訳『金帳汗国史』（生活社，1942年），英語では，Charles J.Halperin, *Russia and the Golden Horde*, Indiana University Press, Bloomington, 1985. がある。

って滅ぼされたことになっている。しかし，コリンズ博士によると，当時イヴァン三世やメングリ・ギライや大オルドのハーンの間に取り交わされた書簡を，18世紀末以来学者たちは故意に無視してきたのである。この時の実状は，大オルドのハーン位がナマガン Namagan 家（ヴォルガの向こう側の人々 Transvolgines とも言う）から，メングリ・ギライ一族のクンチェク Kunchek 家（一名トクタミシュ家）に移ったにすぎない。黄金のオルドで1380年以来続いた内紛が終息し，これ以後，大オルドは，1783年ロシアのイェカテリナ二世に滅ぼされるまで，クンチェク家によって支配されたというのがこの事件の真相である[11]。

クンチェク家の新しい大ハーンは，ポーランド・リトアニア，モルダヴィア，カザン，モスクワなどに承認された。メングリ・ギライの根拠地はクリムであったので，この時大オルドの部衆は大挙してクリムに移動し，大オルドとしてはかつてないほど強力になったとコリンズ博士は言う。ロシアはピョートル大帝の時代まで，このいわゆる「クリム・タタル」に貢税を納めたのである。一方，ナマガン家はやがてヴォルガ東岸のオルドもロシアに奪われ，その後裔の一部はブハラに移住した。

米国ハーヴァード大学ウクライナ研究所（Ukrainian Research Institute, Harvard University）のオメリアン・プリツァーク Omeljan Pritsak 教授によると，1574年，イヴァン四世（雷帝）はモスクワにシメオン・ベクブラトヴィチ Simeon Bekbulatovich なる人物を迎えてツァーリ tsar の位につけ，自分はこれに臣事して，翌年あらためて譲位を受けてツァーリとなったという。このシメオン・ベクブラトヴィチは，旧名をサイン・ブラト Sayin Bulat と言い，モスクワの東南にあったカシモフを領したハーンであった。彼は実は，1502年クンチェク家に大オルドのハーン位を奪われた，ナマガン家の最後の大ハーン・アフメドの曾孫なのである。イヴァン四世自身，父方ではクリコヴォの戦いの「英雄」ドミトリー・ドンスコイの嫡孫であるが，母方ではその敵手ママイの血を引いていた。ママイは，チンギス・ハーンの男系子孫ではなかったが，「白いハーン」と呼ばれたという[12]。モスクワのツァーリも，ラテン語で「白い皇帝」（Albus Imperator）と自称し[13]，後に東方のモンゴル族から「白いハーン」（チャガン・ハーン čaγan qan）と呼ばれた。ロシア帝国も，その出発点はモンゴル帝国の継承国家であったのである。

第三章　四オイラット部族連合

1　四オイラットの構成集団

トルグート Torγoud/Turγaγud/Turgūt[14] 部族は，四オイラット Dörbön Oyirod/Dörben Oyirad[15] 部族連合を構成する一集団である。第二章で述べた中央アジアのチャガタイやジョチの後裔たちは，オイラットをカルマク Qalmaq と呼んだ。この言葉がロシア語に入って，オイラットはカルムィク Kalmyk

11) Leslie J. D. Collins, "The House of Toktamysh." 前出４）と同じ International Seminar における口頭発表。

12) Omeljan Pritsak, "Moscow, the Golden Horde, and the Kazan Khanate from a Polycultural Point of View," *Slavic Review*, XXVI, No.4, 1967, pp. 577−583. 前出８）の山内，60−63頁にも引用あり。

13) Edward Louis Keenan, Jr, "Muscovy and Kazan: Some Introductory Remarks on the Patterns of Steppe Diplomacy," *Slavic Review*, XXVI, No.4, 1967, pp.548−558, p.558.

14) 転写は順にオイラット語/モンゴル語/満洲語。ただしトド文字で書かれるオイラット語には異体がさまざまあり，Toroγoud/Torγuud とも書く。

15) 同様に，オイラット語/モンゴル語の転写。

と呼ばれるようになった。カルマクの語源は明らかではない。

オイラットに四を冠して呼ぶのは，自称，他称ともに，17世紀以降に成立した史料においてである。オイラット史の研究に有用な史料としては，第一に，元朝崩壊後オイラットと対立した新しいモンゴル民族が，17世紀に異民族である満洲人を自らのハーンに推戴せざるを得なくなった後，そのアイデンティティを保つため，祖先以来の系譜と伝承をまとめた各種のモンゴル年代記がある。さらにオイラット人自身が，ヴォルガ河畔でさまざまな異民族に囲まれて暮らす中で，同様に自己のアイデンティティを保つため，祖先以来の系譜と伝承を書き留めたいくつかのオイラット年代記がある。この他，18世紀に最終的にオイラットのほとんどを支配下に入れた清朝の記録があり，17世紀初め以来オイラット諸部と関係してきたロシア人の外交文書と，ヴォルガ河畔のオイラットを調査したヨーロッパ人の記録等が現存する。

17世紀以降の史料に登場する四オイラットが，遊牧部族連合であったことは，その中にぞれぞれ首長を戴くいくつもの部族を含むことから，すでによく知られた事実であった。しかし，その四という数字の意味については，古今東西の史料や学者の間で大いに意見が異なった。その中で，東京外国語大学 AA 研岡田英弘教授の次の説が最も妥当である[16]。

ロシア史料，モンゴル年代記，清朝史料などによると，16～17世紀の四オイラットを構成する集団は，すでに四以上を数える。ヴォルガ・カルムィクに伝わった信頼できる二つのオイラット年代記のうち，トルグート部のエムチ・ガワンシャラブ Emči Γabang šes rab が1737年に著した『四オイラット史 Dörbön Oyirodiyin töüke』は，九集団の名を挙げてこれを四つに分類しており，ホシュート部のバートル・ウバシ・トゥメン Bātur ubaši tümen が1819年に著した『四オイラット史 Dörbön Oyiradiyin tüüke』には十の集団名が挙がっている。

岡田教授は，この両『四オイラット史』に著録された始祖説話や系譜を考証し，その他モンゴル年代記，中国，チベット，ペルシア史料等を分析・総合して，16～17世紀に実際に四オイラット部族連合を構成した諸集団が，次の五グループに分類できることを明らかにした。

(1) 旧オイラット系のホイト Xoyid/Qoyid とバートト Bātud/Baγatud

(2) バルグト Barγud 系のバルグ Barγu とブリヤート Burād/Buriyad

(3) ナイマン Naiman 系のドルベト Dörböd/Dörbed とジューン・ガル Žöün γar/J̌egün γar

(4) ケレイト Kereyid 系のトルグート Toroγoud/Turγaγud

(5) モンゴルの三衛系のホシュート Xošūd/Qosiγud

ラシード・ウッディーン著『集史』「部族篇」によると，13世紀モンゴル帝国時代のオイラット部族の住地は，八河 Sekiz-muren で，トマト Tumad の故居であったという。すなわちイェニセイ河上流とその支流の，今のトゥヴァの地である。その北方はサヤン山脈をへだててキルギズ Kirgiz の住地に接し，南方はタンヌ・オーラ山脈を境にナイマンと接していた。東方ではセレンゲ河のメルキト Merkid に連なり，東北方ではアンガラ河のトマトの地に近かった。トマトはバルグトの一部である.

1208年オイラット王クトカ・ベキはチンギス・ハーンに降って，その臣下となった。この後13世紀のオイラット王家は，チンギス・ハーンの子孫のジョチ家，チャガタイ家，オゴデイ家，トルイ家のすべてと婚姻を通じ，ことにトルイ家の四兄弟，モンケ，フビライ，

16) 以下，岡田　1974年に拠る。

フレグ，アリク・ブガとはいずれも姻戚となった。これはその住地が東南はトルイ家，西南はオゴデイ家，チャガタイ家，西北はジョチ家のウルスと連なり，それらの接点に位置するという戦略上の要衝だったからである。

1260年に始まったフビライとアリク・ブガのハーン位継承争いにおいて，オイラットはアリク・ブガの側に立って，フビライ軍と戦った。戦争の運命を決した1261年のシムルタイ湖の戦いで，フビライ軍に粉砕されたアリク・ブガ軍は，多数のオイラット兵から成っていたという。アリク・ブガ家とオイラットとの姻戚関係は非常に緊密であり，オイラットの住地であるトゥヴァは，アリク・ブガの領地の内に含まれていた。

フビライは，弟アリク・ブガに勝利してモンゴル帝国の大ハーンとなり，彼の建てた王朝は，1271年，国号を大元と定めた。元朝の西北辺の防衛基地はカラコルムで，オゴデイ家のハイドゥやチャガタイ家のドワが中央アジアに勢力をふるっていた。元朝一代を通じて，オイラットのみならず，アルタイ以西の有力部族たちの動向については，ほとんど史料は残っていない。

1368年，朱元璋が大明皇帝の位に即いて元の大都を攻撃すると，順帝トゴン・テムル Toγon temür は大都から逃れた。モンゴル高原に撤退したフビライ家の最後のハーンは，1388年アリク・ブガの子孫イェスデル Yesüder の軍に殺され，フビライ家は断絶する。そして，アリク・ブガ家のイェスデルが，オイラットの支持のもとに，フビライ家に代わってモンゴルのハーン位に即いたのである。オイラットという部族名は，こうして再び歴史の表舞台に登場したが，これ以後のオイラットは，13世紀に知られた旧オイラット部族に，ナイマン部族，ケレイト部族，バルグト部族という，かつてのモンゴル高原西北部の有力部族が連合したものに変わっていた。

この四オイラット部族連合に対して，後世のモンゴル年代記では，自分たちを「四十モンゴル Dočin Mongγol」と呼ぶ。「四オイラット Dörben Oyirad」と頭韻を合わせると同時に，モンゴルがオイラットよりも多くの部族の連合体であったことを表現しているのである。

モンゴル年代記によると，オイラットの首領たちは，チンギス・ハーンの子孫と思われる皇子たちを次々にハーンに擁立したが，実権はオイラットの側にあり，モンゴルとオイラットは対立を繰り返した。『明太宗実録』によると，オイラットの首領は三人であったと伝えられるが，やがてトゴン Toγon がオイラットを統一して，モンゴル高原の実権を握った。

トゴンの息子エセン太師 Esen tayisi は，1452年，父の擁立したハーン，トクトア・ブハ Toγtoγa buqa を殺し，翌年自ら大元天聖大ハーンの位に登った。これが「オイラット帝国」の絶頂期であったが，1454年エセンは部下の反乱で殺され，「帝国」は「瓦解」する。

後世のオイラット年代記の所伝では，トゴン，エセン父子は，17世紀初めにその名が知られるようになったジューン・ガル（左翼）部族長の祖先であり，ジューン・ガル部の首長とドルベト部の首長は，同じ始祖から分かれ，もとの部族名をチョロース Čoros と言ったとある。チョロースの始祖説話は，天山ウイグル王国の始祖説話と非常によく似ているので，ジューン・ガルとドルベトは，昔のウイグル帝国の分支であるナイマン部族の遺民であると岡田教授は考える。

チンギス・ハーンが大興安嶺東方に封じたモンゴルの左翼万戸の後身が，トゴン太師の時代，オイラットの傘下に入った。これより前，元朝が中国を撤退した後，1389年に明の太祖は大興安嶺東の地に遊牧する諸首長を三衛指揮使に任命した。この三衛を北から順に福餘衛，泰寧衛，朶顔衛と言った。これらのモンゴル名は，それぞれオジエト Öjiyed，オンリウト Ongliγud，ウリヤンハン

Uriyangqan である。トゴンは1434年この地を制圧すると，三衛を誘って，はるか西方の独石，宣府，大同，延安，綏徳の明辺に侵寇せしめたが，エセンの時には五原の方面や，さらにエジネの西方にまで三衛の衆を移住せしめたらしい。エセンの死後，その一部は解放されて故郷に帰ったが，恐らく大きな集団がオイラットに残ったのであろう。これが後にホシュート部となった。モンゴル年代記では，ホシュート部の王族の姓をオジエト氏 Öjiyed omoγ-tai と言い，オイラット年代記，チベット史料，その他あらゆるホシュート部の首長の系譜は，一致して，その始祖はチンギス・ハーンの弟ジョチ・ハサル（一名ハブト・ハサル Qabutu qasar）であるとする。

2　15～16世紀のオイラット

オイラットのエセン太師は，モンゴル高原の元朝の遺臣たちを支配下に入れたのみならず，東チャガタイ・ハーン家の支配するモグリスタンにも攻撃をかけた。16世紀半ばにペルシア語で著された有名な『ターリヒ・ラシーディー Ta'rīkh-i Rashīdī』には，「ヴァイス・ハーン（在位1417-1432）は，カーリーマーク Qālīmāq と六十一度交戦したが，一度を除き全て敗北したと言われている」とある。ヴァイス・ハーンは何度かエセン太師（イーサーン・ターイシー Īsān Tāishī）の捕虜になったが，一度はエセンが，ヴァイスがチンギス・ハーンの後裔たることに敬意を表して釈放し，一度はエセンにヴァイスの姉妹を与えて釈放されたという。ヴァイス・ハーンの姉妹はエセンの息子と結婚し，二男一女をもうけた[17]。

「オイラット帝国」が「瓦解」すると，モンゴル高原は再び群雄割拠の時代に入った。すなわち，様々な出自の首長たちが，自己の領民を率いて並び立ち，覇権を争ったのである。明人の所伝によると，エセンは元朝の皇族を皆殺しにし，オイラット人を母とする者のみが助命されたという。混乱の時代を生き延びた，モンゴル高原における唯一のチンギス・ハーンの男系子孫と言われるバト・モンケ・ダヤン・ハーン Batu möngke dayan qaγan の父は，オルドス万戸長ボルフ・ジノン Bolqu jinong で，ボルフ・ジノンの母はエセンの娘であった。

1662年にダヤン・ハーンの子孫の王公の一人が撰した『蒙古源流 Erdeni-yin tobči』というモンゴル年代記は，ボルフ・ジノンの父ハルグチュク太子 Qarγučuγ tayiji が，エセンによる皇族皆殺しの謀略を知り，ジョチの後裔のウルスに逃れる物語を伝える。

トルグート部人を含むオイラットの勇士たちに追われながら，ハルグチュク太子と部下は，「トクモク Toγmoγ のハーンらはジョチの子孫で我らの一門である」と言って，西方に向かう。トクマクという名の都市は，今もチュー河畔にあるが，ここでいうトクモクはもっと広い地域を指している。ハルグチュク太子は，トクモクのアク・モンケ Aγ möng-ke という富人と出会い，彼と友となって住むが，後にアク・モンケの弟に殺された[18]。

ダヤン・ハーンは15世紀末にハーン位に即き，その後三十八年にわたる治世中に，モンゴル各部を統一して，これを左右翼各三万戸に再編成した。左翼のチャハル Čaqar，ハルハ Qalq-a，ウリヤンハン Uriyangqan はゴビ砂漠の東北に遊牧し，ハーンの直轄に帰した。右翼のオルドス Ordos，トメト Tümed，ヨンシエブ Yöngsiyebü は西南の方，中国の長城沿いに遊牧した。オイラット諸部は，旧カラコルムの地を含めたハンガイ山からアルタイ山にかけての故地を中心に遊牧していたと思われるが，記録がないため，詳細は明らか

17）N.Elias & E.D.Ross, *A History of the Moghuls of Central Asia, Tarikh-i Rashidi*, London, 1895, p.91.　間野英二「十五世紀初頭のモグーリスターン—ヴァイス汗の時代—」『東洋史研究』23－1，1964年，1－27頁，12－15頁。

18）ET, pp.112－113，括弧内は57v16－17.　岡田　1966，27－28頁。

ではない。

新たに統一されたモンゴルでは，ダヤン・ハーンの死後，お決まりのハーン位継承争いとなった。右翼のトメト部長アルタン Altan は，ダヤン・ハーンの孫ではあったが，嫡流ではなく，正統のハーンではなかったけれども，モンゴルで最も実力のある指導者となり，異族に対する征服戦争に大いに力を発揮して，正統のハーンから，トゥシェート・セチェン・ハーン Tüsiye-tü sečen qaγan の称号を授けられた。トゥシェートとは，補佐するという意味である[19]。

アルタン・ハーンと彼に率いられた一族の王公たちは，旧敵オイラット征伐に乗り出した。前述の『蒙古源流』等のモンゴル年代記は，モンゴルが征服したオイラット諸部の名称と諸首長の名とその戦場を伝える。

「1552年，アルタン・ハーンは四オイラットに出馬して，クンゲイ，ジャブハンの上に八千ホイトの長マニ・ミンガト Mani mingγatu を殺し，その妻子と全部衆を降服させ，四オイラットを支配下に入れた」

「1562年，オルドス部のフトクタイ・セチェン・ホンタイジは四オイラットに出馬して，イルティシュ河上にトルグートを襲ってハラ・ブーラ Qara buγura を殺した」

「1574年，ブヤン・バートル・ホンタイジ兄弟たちが四オイラットに出馬した。丁度シル河畔でトクマクのアハサル・ハーン Aqasar qaγan（カザフのハック・ナザル・ハーン Haqq nazar khān）の軍を破り，二人の弟の仇討をして凱旋中であったフトクタイ・セチェン・ホンタイジは，これを聞いてバルス・コルに輜重を留め，オイラット征伐に参加した。ブヤン・バートル・ホンタイジはハルガイの南で，エセルベイ・キヤ Eselbei kiy-a を長とする八千ホイトをことごとく降していた時，セチェン・ホンタイジはジャラマン・ハンの北で，ハムス Qamsu，ドリトク Düridkü 二人を長とするバートトを掠奪し，彼の息子オルジェイ・イルドゥチは三ヶ月経つまで追いかけて，トブハン・ハンの南にチョロース Čooroγas のバジラ・シゲジン Bajira sigejin を長とするドルベト・オトクを掠奪して引き返した」[20]

「1580年代末，コブコル・ケリエの戦いで，ホシュートのハーナイ・ノヨン・ホンゴル Qanai noyon qongγor は，ハルハのアバダイ・サイン・ハーンに殺された」[21]

1552年の戦闘のあったクンゲイ，ジャブハン両河は，ハンガイ山脈とアルタイ山脈の間にあって，キルギス・ノール（湖）に注いでいる。1580年代末の戦闘のコブコル・ケリエの地も，ジャブハン河の南，アルタイ山の北に位置する交通の要衝である。その他の地名はこれよりさらに北あるいは西の方である。

オイラット諸部は，16世紀半ばにはモンゴルに追われてアルタイ山脈以東を明け渡し，イルティシュ上流域や故地トゥヴァの方面に逃れたのであった。

上記の『蒙古源流』の記事では，後のカザフをトクマクと呼んでいるが，前述のハルグチュク太子の記事よりさらに前の記述に，「ジョチはトクモクにハーンとなった」[22]とあり，同書ではトクマクをチンギス・ハーンの長子ジョチのウルスを指す言葉として使用している。カザフ民族はウズベク族の分かれで，そのハーンはジョチの長子オルダの後裔であると言われているから，モンゴル族はかれらについて正確な情報を持っていたのであ

19) Jüründγ-a（珠荣嘎）校注，*Erdeni tunumal neretü sudur orosiba*（『阿拉坦汗伝』），民族出版社，1984年，50頁。宮脇 1991a，46－48頁。

20) ET, pp.138－143, 70r17－23. 70v14－17. 72r05－72v09. 宮脇 1991a，48－49頁。

21) Galdan, *Erdeni-yin erike.* Monumenta Historica, Tomus I, Fasc.1, Ulaanbaatar, 1960, pp.88－151, p.88. 岡田 1974，15－16頁，宮脇 1991a，51頁。

22) ET, p.83, 42v07－08.

る。

現代の通説では，モンゴル帝国は13世紀後半に四ハーン国に分裂し，14世紀半ばにはそれらの継承国家も崩壊したと，見なされるのが常である。しかしそれはあくまで，モンゴル帝国の被征服民族であった定住民の側から見た歴史解釈である。モンゴル帝国の支配者側の後裔である遊牧民は，その後も長くモンゴルの伝統を保った。中央ユーラシア草原に広く分布する各遊牧集団は，互いに相手が帝国の後裔であり，ライヴァル関係にあることを自覚していたのである。

第四章　トルグート部の移住の背景

さて，時代はようやく17世紀に入った。長い前置きはこれで終わり，いよいよ本論の主人公トルグート部の活躍が始まる。

トルグート部の始祖について，前述のガワンシャラブ著『四オイラット史』は次のように言う。

「アルダル・カブチュ Aldar Kabču のお言葉に『バイル Bayiri というのはチベット語 Tangγad である。ダライ・ハーン Dalai xānのお言葉に，「ワン・ハーン Vang xān はチンギスと同姓」と仰せられ，清の将軍ドルジ・ラブタン rDo rže rab tan に「汝はワン・ハーンから出たものである。汝の兄弟のもとに連れて行こう」と言っている。トルグートがワン・ハーンから出たことはモンゴルの書にあるぞ』と書かれているので，記さなかった」

このダライ・ハーンは，青海ホシュート部のグーシ・ハーン Güüši xān の長孫ゴンチョク・ダライ・ハーン Gončoq dalai xān（在位1668－96）であろうと岡田教授は言う。モンゴル年代記『シャラ・トージ Sira tuγuji』の本文の系譜に「トルグートというものは，ケレイトのオン・ハーンの後裔である」とあるので，上記のワン・ハーンがケレイトのオン・ハーン Ong qan のことであるのは言を俟たない[23]。

ケレイトのトグリル・オン・ハーンは，最初チンギス・ハーンの主君であったが，連合してモンゴル高原の諸部族を征服した後，利害が対立し，チンギス・ハーンに滅ぼされた。ガワンシャラブがなぜ，ケレイトのオン・ハーンをチンギス・ハーンと同姓であると言っているのかについては，後述する。

ガワンシャラブは続ける。

「トルグートがオイラットと同盟した最初は(1)キワン Kivang，その息子は(2)スサイ Susai，その子は(3)バイル Bayir，その子は(4)メンゲ Mengge，メンゲの子は9人で，長は（5-1）ボイゴ・オルロク Boyiγo örölöq，次は（5-2）オンゴン・チャブチャーチ Ongγon čabčāči，3番目以下の諸子は人喰いのケレート Maxačiyin Kerēd である」[24]

トルグート部が清朝に臣属した後，1779年に乾隆帝の命を受けて『欽定外藩蒙古回部王公表傳』（以下『表傳』と略す）の纂修が開始され，1789年に満漢文本が完成，1795年までの記事を含む満漢蒙三体本が武英殿で刊行された。この『表傳』の満文本では，(4)メンゲをマハチ・ムンケ Mahaci mungke と綴る[25]。一方，1768－69年と1773－74年にヴォルガ・カルムィクで調査を行った，パラス P.S. Pallas 著『モンゴル民族史料集成』では，これをマハチ・メンゴ Machatschi Menggö と綴り，その名にまつわる興味深い伝承を紹介する。「マハチの意味は人喰いであるが，その名の由来は，メンゴが自分の大変美しい娘を，次々と7人のノヤンたちに妻あわした後で，婿たちをひそかに殺してその部衆を奪

23）DOT, p.74, ll.6–9.　岡田　1974，36－38頁。
24）DOT, P.74, ll.10–13. 人名に付した括弧内の数字は筆者。
25）IU，巻101，1b－2a. 満漢蒙三体の『表傳』の編纂の経緯については，宮脇　1991b を参照のこと。蒙文本より満文本の方が先に編纂されたことが明らかなので，人名の転写も満文本に拠る。

ったことによる」[26]

ガワンシャラブが伝えている，メンゲの第三子以下が人喰いのケレートと呼ばれたというのは，このような理由であろう。

ガワンシャラブは続ける。

「(5-1) ボイゴ・オルロクの長子は (6-1) ジュルジャガ・オルロク Žulžaγa örölöq (残る5人の子の名は省略)，ジュルジャガの子は(7)ホー・オルロク Xō örölöq，ホー・オルロクの6人の息子と6人の娘のうち，長子は (8-1) ホダイ・シュクル・ダイチン Xodai šükür dayičang，次子は (8-2) イェンデン Yendeng (イェルデン Yeldeng)，三子は (8-3) キレセン Kiresen，四子は (8-4) シャジン Šažin，五子は (8-5) ローザン Blo bzang，六子は (8-6) シュンケイ Šüngkei」[27]

(7)ホー・オルロクこそ，トルグートの部衆の大部分とホシュートの部衆の一部を引き連れて，1630年にヴォルガ河畔に至ったその人である。

トルグート部の大部分が，1771年，ホー・オルロクから数えて七世の孫ウバシ Ubaši に率いられてイリの故地に帰還した後，ヴォルガ河畔に残ったカルムィクで書かれた後世の年代記『カルムィク・ハーン略史 Xalimaq xādiyin tuužiyigi xurāži bičiqsen tobči orošibai』では，その冒頭で，この時の移住について次のように伝える。

「いま現在イジル河 Ižil müren (ヴォルガ河) 付近に住む，モンゴル系で，それらと同じ宗教を持ち，同じ言葉を持つハリマク Xalimaq (カルムィク) ・ウルスが，昔の故郷を捨ててオロス Oros (ロシア) の中に来て住んだことを言うならば，ジューン・ガルのドルベン・オイラットで乱となった時，トルグートのタイシであったホー・オルロクという者が『そのように互いに殺し合ってアルバト albatu (属民) たちが尽きるよりは，遠い土地に行って異姓の xari yasutu ウルス (部衆) の近くに住んで，彼らと戦い，戦利品を取って暮らす方がましになろうぞ』と考えて，戊午の年 (1618) にカスピ Kāspu 海の方に心利いた人を遣わして，その土地は主がないと確かに知って，戊辰の年 (1628) に自分のアルバトのトルグート，及びホシュートとドルベト五万家族 örkü を連れて，六人の息子を従えて，ジューン・ガルのもとの牧地を捨てて，日の沈む方向に出発した。ジャイ Žai (ウラル) 河に到らないうちにエンバ Embe 河の傍らに牧地をもつ一群のタタル Tatār を打ち負かし，ジャイ (ウラル河) を渡ってノガイ Naγai，キタイ Xatai，キプチャク Xabčiq，ジテシェン Žitešen というタタル人たちを征服して，庚午の年 (1630) にイジル (ヴォルガ河) に到った」[28]

この『カルムィク・ハーン略史』は，上記の1618年の記事に始まり，清朝の臣下となったウバシ・ハーンが1775年に死ぬまでの，トルグート部を中心に記述した編年体の歴史で，他のオイラット年代記とは性質の異なる史料である。ロシア史料や清朝史料をも参照し，筋の通るように整理しているので，同時代史料と比較すると誤りもあるが，その中には他の史料にはない貴重な伝承をも含む。前述のガワンシャラブ著『四オイラット史』は，トルグートの移住について次のように記すのみである。

「四オイラットから離れた年の時代を書く。戊辰の年 (1628) に，四オイラットのノヨンたちに自分が離れることを知らせて，己巳 (1629) に離れ，ローザン Blo bzang は庚午 (1630) にジャイ (ウラル河) とイジル (ヴォルガ河) を渡って，マンガット Mangγad (ノガイ) を降して取った。その年にオルロク，ダイチンの家族はジャイの向

26) Pallas, Part I, p.56.
27) DOT, p.74, ll.13−18.
28) XXT, p.1，英訳は，Halkovic, pp.41−42.

こう岸に，壬申の年（1632）にダイチンの家族はイジルに下馬した」[29]

『カルムィク・ハーン略史』で，トルグート部が移住する以前の故地を「ジューン・ガル」と呼んでいるのは，本書が，ジューン・ガル部が清朝に滅ぼされた後に書かれたためで，現在の「ジュンガリア」という地理的名称と同じ意味で使用しているのにすぎない。トルグート部がヴォルガ河畔に移住した1630年前後には，四オイラット部族連合の中におけるジューン・ガル部の地位は，それほど高くはなかった。また同様に「オロスの中に来て住んだ」と言っているのも，本書が書かれた時代には，カルムィクの住地はすでにロシアの領土に組み込まれていたためであるが，移住当時には「その土地は主がない」のであった。

ヴォルガ河畔に移住したカルムィクは，トルグート部がほとんどであったが，その中にはホシュートとドルベトの一部も含まれていた。その理由は，後述するように，ホー・オルロクの息子がホシュートの王族と縁組し，娘がドルベトの王族と縁組していたためである。ただし，ドルベトの一部は1644年になって，ヴォルガ・カルムィクに加わった。

遊牧民のノヤン（殿様）の一族は，男も女も自己の家畜と属民を持っていた。女は親から婚資を得て嫁入りしたし，男は原則として，兄弟が均等に親の財産を相続した。また，モンゴル帝国時代と同様，遠征には，掠奪品の分配を受ける権利を確保するために，様々な王族が属民を率いて参加した。トルグート部の一部は，ホシュート部のグーシ・ハーンに従って青海遠征に赴き，現在の中国青海省に居を占めたのである。

トルグートのタイシすなわち部族長であったホー・オルロクが，「互いに殺し合ってアルバト（属民）たちが尽きるよりは，遠い土地に行って異姓のウルス（部衆）と戦い，戦利品を取って暮らす方がましになろうぞ」と考えた動機は，1620年代にホシュート部の王族の遺産争いに端を発して，四オイラットが内乱状態になったことであった。筆者はかつてこれについて論じたことがあるので，ここでは，ロシア史料が伝える事件を，モンゴル・オイラット史料によって登場人物の出自を明らかにして，概要だけを述べる。

1625年にトボリスクに伝えられた情報によると，ホシュート部のヤダイ・チンサンの息子チン・タイシャ（タイシ）が死に，その遺産をめぐって，チン・タイシャの弟チョークル[30]と，彼らの母アハイ・ハトンが夫の従兄弟ハーナイ・ノヨン・ホンゴルと再婚して産んだ五子の長男バイバガスの間に争いが生じた。ドルベトのダライ・タイシが調停に入ったが，チョークルの側にはトルグートのメルゲン・テメネ（上記オンゴン・チャブチャーチの孫でホー・オルロクの再従兄弟）らが付き，バイバガスを襲った。ジューン・ガルのハラフラはバイバガスを援助した。

どの戦いにおいてか明らかではないが，バイバガスは戦死し，その兄弟のチョークルが代わってタイシャになったと，ロシア外交文書史料は伝えている。このタイシャの称号は，ホシュート部族長の意味であろう。

ところが，ドルベトのダライ・タイシと，殺されたその姻戚のバイバガスの弟グーシ，同じくバイバガスの次弟コンデレン・ウバシは，イシム河からトボル河まで逃げていたチョークルを追い続け，ついに1630年，ヤイク（ウラル）河に到ってチョークルの部民を殺害した。これより前，チョークルの娘婿であ

29）DOT, p.95, ll.14−18.

30）本論に登場するオイラットの人名の綴りは，史料ごとに甚だしく異なる。例えば，このチョークル Čökür/Chokur は，あるいはチューケル Čöüker，シュクル Šükür，シュケル Schüker，チュイクル Cuikur，チュクル Chukur などとも綴る。煩雑を避けるため，本論では以下，人名の綴りの転写をいちいち挙げない。

るトルグートのホー・オルロクの息子シュクル・ダイチンは，殺されるのを恐れて，チョークルのもとから父のもとへと全ての民を率いて逃げた[31]。

ソ連の研究者ズラートキンが1964年に著した『ジュンガル・ハン国史（1635－1758）』では，このチョークル，バイバガス，チン・タイシャを，すべてジューン・ガルのハラフラの息子と見誤ったため，この事件をジューン・ガルの内乱とした。実は彼らはホシュートの王族である。ロシア史料が「兄弟 brat」とするチョークルとバイバガスは，同母異父兄弟で，父方では再従兄弟であった。筆者はモンゴル年代記『シャラ・トージ』追補によって，この事実を発見したのである[32]。

話は少し戻るが，1616年にオイラット（カルムィク）の地を訪れたロシア使節は，「全カルムィクの筆頭タイシャはボガティル・タライ・タイシャで，人々は彼をツァーリ（＝ハーン）と呼ぶが，彼自らはツァーリと称さない」と報告し，また「彼の主な相談役は，タイシャ・チュクルとウルリュク・タイシャであった」と伝えている[33]。

かつて筆者が証明したように，この1616年当時のカルムィクの筆頭タイシャは，ドルベト部のダライ・タイシであり，彼の側近にいた相談役のチュクルは，ホシュート部のチョークル，ウルリュクはトルグート部のホー・オルロクであった[34]。ホー・オルロクの息子シュクル・ダイチンは，チョークルの娘と結婚し，ホー・オルロクの娘はダライ・タイシと結婚していた。彼らはホシュート部の遺産争いが起こるまでは，緊密な同盟関係を結んでいたのである。

上記の1625年に起こったと思われる遺産争いの前には，1620年から23年にかけて，オイラット部族連合とモンゴルのハルハ部との戦争があった。これについてもかつて論じたので，概要だけを述べる。

16世紀半ばにトメト部のアルタン・ハーンの指揮下に始まった，新たなモンゴル民族によるオイラット討伐の任務は，最後にはハルハ部の右翼に移った。ダヤン・ハーンの後裔の一人，ハルハ右翼のショロイ・ウバシ・ホンタイジは，オイラット諸部やキルギズなどを支配下に入れ，17世紀初めにシベリアに進出したロシアに対して，アルティン・ツァーリ（アルタン・ハーン）を名乗った。彼の本拠地は，かつてのオイラットの住地ウブサ・ノール付近であった[35]。

1620年ジューン・ガル部のハラフラとトルグート部のメルゲン・テメネがアルタン・ハーンを攻撃したが，かえってアルタン・ハーンに打ち負かされ，ハラフラは妻子を奪われた。ロシア史料によると，カルムィクのタイシャたちは，アルティン・ツァーリとカザク・オルダ両方に攻撃され，シベリアのロシアの要塞近くに到った[36]。

シベリアのイシム河とトボル河の間，あるいはオビ河とイルティシュ河の間の塩湖（ヤムィシュ湖）の周囲に属民を連れて避難したオイラット諸部の首長たちは，1623年連合軍を組織してモンゴルのアルタン・ハーン・ウバシ・ホンタイジとの決戦に出場し，アルタン・ハーンを殺したのであった[37]。

このオイラットとモンゴルの戦争を題材にしたオイラットの文学作品『ウバシ・ホンタイジ伝』は，この時の四オイラット連合軍に

31）RMO, dok.nos.70,72,77. 宮脇 1981，47－50頁。宮脇 1983，176－177頁，180－181頁。屋敷 1981，9－12頁。
32）宮脇 1983，176－177頁。
33）RMO, dok.no.18. 屋敷 1981，3頁。
34）宮脇 1981，41，51－54頁。宮脇 1983，176－177頁。
35）宮脇 1991a，48－54頁。
36）RMO, dok.nos.47,48,50,52,55,56,63,64. 宮脇 1981，44－46頁。
37）岡田 1968，99－101頁。

ついて，「ドルベトのサイン・セルデンキは二千の兵を，ホイトのエセルベイン・サイン・カーは四千の兵を，ジューン・ガルのハラフラは六千の兵を，トルグートのサイン・テメネ・バートル（メルゲン・テメネ）は八千の兵を，ホシュートのバイバガス・ハーンは一万六千の兵を率いた」と歌う[38]。これは史実に基づいてはいるがもちろん創作で，ロシア史料によると，その他にドルベト部のダライ・タイシ，ホシュート部のチョークル，トルグート部のホー・オルロクも戦闘に加わったことが知られる。

トルグート部のホー・オルロクが，西方に新天地を求めて移住した時代の四オイラット部族連合は，以上のような状況であった。まだジューン・ガル部は連合体の盟主ではなく，オイラット諸部はようやくモンゴルの支配を脱したばかりであった。再び群雄割拠の時代が始まったと言ってもよい。

しかし，ヴォルガ河畔に住地を広げても，トルグート部が自らを四オイラット部族連合の一員であると見なしていたことは，第六章で後述するような様々な証拠によって明らかである。また，ホー・オルロクが平和を愛好して移住したのではないことは，次章で明らかになるだろう。

第五章　トルグート部とロシアとの関係

1606年９月，トルグート部のホー・オルロクは，ロシア人がイルティシュ河畔に1594年に建設した要塞タラに，初めての使者を遣わした。翌1607年１月，タラからの使節が，ドルベト部のウルスを訪ねた。半年後，モスクワの使節は，ドルベトの首長たちの代表者を連れて，タラからモスクワへ向かった。

ソ連の歴史学者は，この1608－９年をもってカルムィクはモスクワ政府の臣民となったと認定するが，カルムィクの首長たちは，タラの町及びモスクワと同盟を結ぼうとしたにすぎない。ホー・オルロクも，隣接することになったタラの住民と境界紛争を解決し，平和に交易し，使節を交換しようとしたのである。ところがモスクワは，ホー・オルロクがツァーリの臣民になることを願ったと信じて，彼のもとに使者を派遣して，モスクワの宗主権を認めて人質を出すか，そうでなければその地を立ち退くように求めた。ホー・オルロクは侮辱されたと思い，モスクワからの使者を殺すように命じたという[39]。

モスクワは，イルティシュ河やオミ河やイシム河付近で遊牧するカルムィクの首長たちに，モスクワの宗主権を認めてヤサク（貢税）を払うように繰り返し要求した。モスクワ政府は，カルムィクが他のシベリアの狩猟民とは異なる，自由な遊牧民であることが理解できなかったのである。カルムィクの首長たちは，自分たちはこれまで誰に対してもヤサクなど支払ったことはない，と断乎として主張した。1610年から15年にかけて，カルムィクはタラの守備隊とこぜりあいを繰り返した[40]。

カルムィク＝オイラットからすれば異族であるノガイ族は，1608年にはエンバ河付近に遊牧していたことが知られる。三年後，ノガイはウラル河でカルムィクの襲撃を受けた。1613年には四千人のカルムィクの先鋒隊がウラル河を渡ったので，ノガイはヴォルガ河の方へ逃げた[41]。

前章で述べた1620年代のオイラットの内乱が起こる前，すでにオイラット諸部は，イルティシュ河からウラル山脈の南に至る地域に

38）岡田　1968，89頁。宮脇　1983，178－179頁。
39）RMO, dok.no,4.　Khodarkovsky 1988a, pp,226－227.
40）RMO, dok.nos.10,13.　Khodarkovsky 1988a, p.227.
41）S.K. Bogoiavlenskii, "Materialy po istorii kalmykov v pervoi polovine 17 veka," *Istoricheskie zapiski*, 5(1939), pp.56－57.　Khodarkovsky 1988a, p.228.

行動範囲を広げていたのであった。あるいは，記録がないだけで，これより昔にもそうだったのかもしれない。

アブル・ガージー著『トゥルクメン族系譜 Shejere-i Terākime』によると，ホー・オルロク率いる一万のカルムィクは，1630－31年にエンバ河とウラル河上流域の草原に侵入した。翌年には，ホー・オルロクのウルスは，トボル河とイシム河上流域の間を遊牧していた[42]。

1633年春，ホー・オルロクの息子たち，ダイチンとローザンは，ノガイを襲撃してアストラハンの近くに到った。アストラハン知事は，カルムィクを阻止しようとマスケット銃部隊を派遣して，ノガイの戦列に加えたが，カルムィクに包囲されて和睦に同意した。ノガイのミルザたちは，ウルスを率いてカルムィクに加わることを約束させられた。続いて1634年にも35年にも，アストラハン付近に遊牧するノガイはカルムィクの襲撃を受けた。

1635年までにノガイ族のほとんどがヴォルガ河を渡り，アゾフ海に臨むオスマン帝国の要塞近くに避難した。二年後，ダイチンが再び来襲するという報知におびえたノガイの人々は，さらに逃げてドン河を渡り，クリム（黄金のオルドの後身）に保護を求めたのである。ノガイがアゾフを放棄してクリムに逃げたため，1637年にはドン・コサックが要塞を占拠した。同年クリムとノガイの連合軍は，モスクワの南方にあるオカ河にまで掠奪に出かけた。モスクワはあわてて新たな防衛線を築いたほどである。そういうわけで，1630年代末には，トルグート部を中心とするカルムィクは，カスピ海沿岸の広々とした草原を完全に支配下に入れたようである。1639年にホー・オルロクはブハラの近くで冬を過ごし，トボル河畔で夏を過ごしたと報告されている[43]。

『カバルダ・ロシア関係史料集』やその他のロシア史料によると，1643年８月，ホー・オルロクを中心とした，カルムィクの大軍事作戦の手はずが整った。まずいくつかの分遣隊がヴォルガ河を渡って，テレク河とクバン河付近でノガイを掠奪した。ローザンが率いる部隊はクバン河に到って，ノガイの数集団を破った。ダイアン・エルケ率いる部隊はテレク河に進軍したが，ノガイは山に逃げ込んだ。1644年冬，ホー・オルロク自身が一万余騎の兵を引き連れて，ヴォルガ河とテレク河を渡り，カフカス山脈の中，カバルダ（チェルケス）に攻め込んだ。この遠征がホー・オルロクの最後のものとなった。カバルダとノガイの連合軍がホー・オルロクの兵士多数を殺し，多くのカルムィクを捕虜にした。ホー・オルロクと彼の息子ケレサン（三子キレセン）と二人の孫息子がこの戦いで死んだ。一万人のカルムィクのうちようやく二千人だけが生き残ったという惨敗であった[44]。

前述のオイラット年代記『カルムィク・ハーン略史』には，「ホー・オルロクがアストラハン市を襲った時，その町のロシア人たちがカルムィクを攻め逐ったので，ホー・オルロクはその戦いで殺された」[45]とある。これまで，トルグート部長ホー・オルロクは，ロシア人に殺されたというのが定説となっていた。上記のように戦闘中に死んだのならば，遊牧騎馬民の英雄の最後にふさわしい。

この頃モスクワ当局にとっては，ようやく懐柔したヴォルガ左岸のノガイを駆逐して，クリムと合流させたカルムィクは，歓迎され

42) Abul-Gazi, *Rodoslovnaiia turkmen*, ed.and trans. by A. N. Kononov (Moscow-Leningrad: AN SSSR, 1958) , pp.44－45. Khodarkovsky 1988a, p.231.

43) 以後は，ホダルコフスキー氏の引用史料はいちいち挙げない。Khodarkovsky 1988a, pp.232, 234.

44) Khodarkovsky 1988a, p.237.

45) XXT, p.2, ll.6－8. Halkovic, p.42 には，'Kho Orlökh was captured in that battle' とあるが，誤訳である。

ざる客であった。一方カルムィクの方では，アストラハン付近での交易を強く望んでいた。17世紀半ばになって，黒海北岸の支配をめぐる国際間の紛争が激化すると，モスクワ当局は，ロシアの要塞都市における交易を許可する代償として，クリムに対してカルムィクの軍事力を利用しようと考えるようになった。

1655年モスクワ政府とカルムィク・タイシャの間で最初の協定書が交わされた。しかしさまざまな理由でこれは何の効力も発揮しなかったので，翌年も，さらにその翌年にも誓約書が作られ，カルムィクのタイシャたちはこれに署名した。モスクワはカルムィクがヴォルガの両岸に移住し，アストラハン，チェレヌイ・ヤール，ツァリツィン，サラトフ，サマラの諸都市で無関税交易を行うことを許可したので，シュクル・ダイチンの息子プンチュクは，1657年そのお返しに，アゾフ近くのノガイを攻撃した。

ホダルコフスキー博士は言う。ソ連の編纂史料はこの1650年代半ばの誓約を非常に重要視し，ロシア・カルムィク関係の転換点であると見なすが，これをもってカルムィクがモスクワに臣従したとする根拠は全くない。カルムィクにとって，これは単なる軍事同盟すなわち相互不可侵条約にすぎなかった。誓約書の原文はロシア語で書かれ，前もってモスクワ政府によって用意されたもので，これにカルムィクの代表たちが署名したのである。通訳はタタル語を介する二段階のものであったが，正確に翻訳した場合には，どちら側も激怒したという[46]。

当時のヴォルガ・カルムィクの首長は，ホー・オルロクの長子シュクル・ダイチンであった。彼は弟イェルデン，ローザンとともに，1655年から三年続けて清朝に贈物を携えた使節を派遣し，同時に1655年にペルシアのシャー・アッバス二世にも使者を遣わした。それどころか，モスクワがカルムィクと軍事同盟を結んだ最大の理由である「共通の敵」クリム・ハーンとも，カルムィクは使節の交換を行っていた。1658年にモスクワに届いた情報は，ダイチンとクリム・ハーンがモスクワに対する共同軍事行動に同意したというものであった[47]。

モスクワは，クリム・ハーンを上回る様々な贈物をカルムィクに与えたのみならず，ついには毎年の俸給も約束せざるを得なかった。モスクワからの贈物と俸給は，カルムィクのタイシャたちにとって都合のよいものではあったが，かれらはその後も自由に振舞い，モスクワの思い通りにはならなかった[48]。

しかし，カルムィクの中での権力争いに勝つためには，モスクワとの同盟関係が有利に働いた。やがて，カルムィクのタイシャたちは，贈物と俸給の代償に，ロシアが行う戦争に兵隊を派遣するようになる。ロシアの利益のためだけではなく，ノガイやクリム・タタルを破ることは，かれら自身の牧地を広げる上でも有効であったのである。

モスクワ当局にとってカルムィクの軍事的貢献の意義は，アユーキ・ハーンの時代に最大限に達した。アユーキはシュクル・ダイチンの息子プンチュクの子で，1669年から1724年までの半世紀以上もの間，ヴォルガ・カルムィクの首長であった。この間ロシアはオスマン・トルコと断続的交戦状態にあり，カルムィクは一連の戦争の間，クリム，カフカスを舞台にロシア軍の一翼を担った。

とりわけ1700－21年のスウェーデンとの戦争に際して，ロシアの軍事活動中に占めるカルムィクの比重は増した。戦争の最初の年，カルムィクの小さな分遣隊が，北ロシアのラドガ湖近くの戦闘に従軍していたことが報告されている。カルムィクの分遣隊は通常，コサック，タタル，バシキルなど雑多な兵士で

46) Khodarkovsky 1988a, pp.240－243.
47) Ibid., p.244.
48) Ibid., pp.245－253.

構成される「下ヴォルガ騎兵隊」に所属した[49]。

対スウェーデン戦争終了後，全ロシアの皇帝を称したばかりのピョートル一世は，ロシアとカルムィクとの関係を強め，カルムィクの参戦を確実にするために，カルムィク・ハーンと会見することにした。1722年初夏，ピョートル一世がアストラハンへ向かう途中，二人の君主はサラトフ近くで会見した。目撃者によると，アユーキは二人の息子と50名の随行員とともに馬でやって来て，ヴォルガの岸の20ヤード手前で下馬し，そこで枢密官の出迎えを受けた。皇帝は河岸まで出向いてアユーキに挨拶し，かれをガレー船に招いた。アユーキの妻は同様にして皇后に迎えられた。

ピョートル一世はアユーキに一万の騎兵隊の供給を求め，アユーキはこれに対して五千を送ることを約束して，自分の勇敢な騎兵ならば，五千あればピョートル一世の目的には十分かなうであろうと如才なく説明した。アユーキはツァーリに80頭の駱駝を，皇后に50頭の妊娠している牝馬を贈った。皇后はアユーキの妻に，ダイヤモンドをちりばめた金の腕時計と，錦と絹を与えた[50]。

ピョートル一世は，タタル人をカルムィク部隊に入れないようにと特にアユーキに頼んだが，後に，クバン・ノガイのスパイがカルムィクの服装をして従軍し，ロシア軍の配置をバフティ・ギライ・スルタンに報告していたことが判明したという[51]。

アユーキの治世の末期には，カルムィクとロシアの力関係にはすでに変化が生じていた。アユーキといえども，カルムィク内部の抗争や外部の遊牧部族の掠奪に困って，ロシアの援助を要請することもあった。しかし，アユーキの時代を通して見るならば，カルムィクの首長は依然として独立した遊牧民の指導者であって，アユーキはロシア当局との同盟関係を，専らカルムィクにおける自己の権力強化に利用しながら，対外交渉においては，ロシア当局の敵と通じることも自由であった。

アユーキの死後イリに帰還するまでのカルムィク・ロシア関係は後述することとして，次章では，ヴォルガに移住した後のトルグート部と他のオイラット諸部との関係について，概観しよう。

第六章　トルグート部と他のオイラット諸部

第四章で述べたように，1625年に始まったホシュート部の内乱は，ウラル河まで逃れたチョークルの部民が殺害され，故バイバガスの弟たちが勝利して終結した。バイバガスの弟グーシは，亡き兄の未亡人を娶ってホシュート部族長となり，チベットのゲールクパ（黄帽派）の要請に応じて，1636年青海に遠征した。

グーシは1637年初め，青海において，カルマ・シャマルパ（紅帽派）を奉ずるハルハ・モンゴルのチョクト・ホンタイジの三万の軍を破り，その秋ラサでダライラマ五世から持教法王 bsTan 'dzin chos kyi rgyal po の称号を授けられた。これ以後，かれは大グーシ・シャジン・バリクチ・ノミーン・ハーン Dai güüši šažin bariqči nomiyin xan，あるいは単にグーシ・ハーンと呼ばれる[52]。

チベット史料によると，グーシ・ハーンは，この戦いに同行したジューン・ガルのハラフラの息子にバートル・ホンタイジの号を授け，自分の娘アミンターラを妻あわせて，その後ジュンガリアと呼ばれるようになる故地に帰したという。ただロシア史料によると，ハラ

49）Khodarkovsky 1988b, p.6.
50）Ibid., p.35.
51）Vasilii Bakunin, "Opisanie istorii kalmytskogo naroda," *Krasnyi arkhiv* 3, 1939, p.206. Khodarkovsky 1988b, p.35.
52）宮脇　1991a，59頁。

フラの息子はすでに1635年にはホンタイジ号を有しており，アミンターラの産んだセンゲの年齢を考慮すると，青海遠征以前に，グーシ・ハーンの娘がバートル・ホンタイジに嫁入ってかれらは同盟関係を結び，称号も得ていたと思われる[53]。

ホンタイジは，中国語の皇太子を語源とするモンゴル語であるが，モンゴルに正統のハーンに次ぐ第二位のハーン，アルタン・ハーンが誕生した後，それまでの副王が帯びたジノン（晋王を語源とする）号に代わって，ホンタイジが，ハーンの片腕である副王を意味する称号として使用されるようになった。ことにハルハのホンタイジたちは，西方の異族の征服と統治をハーンから任されたハーンの全権代理であった[54]。ジューン・ガルのホンタイジもまた，オイラット諸部の対カザフ戦争を指揮して名を挙げたのである。

ホシュート部のグーシ・ハーンが，内外に認められたオイラット最初のハーンである。先に見たように，四オイラットを構成する諸集団の首長の中に，チンギス・ハーンの男系子孫はいなかった。ただ，ホシュート部はモンゴルの三衛の後身で，その王族の系譜はチンギス・ハーンの弟ジョチ・ハサルに遡ると言い伝えられていた。

モンゴル帝国が地方政権に分裂した後も，中央ユーラシアの遊牧民社会では，チンギス・ハーンの男系子孫だけがハーンを称することができるという，チンギス統原理 Chinggisid principle が，不文律として生き続けていた。チベットのダライラマ五世のごとき野心家ですら，この原理を無視することはできなかったのである。ホシュート部のグーシ・ハーンならば，チンギス・ハーン自身の男系子孫ではなかったけれども，チンギス・ハーンと同姓の，一族の子孫であると，清朝やモンゴル諸部に認めさせることができたのであった。

一方，ヴォルガ・ステップに本拠地を移したトルグート部のホー・オルロクは，1633年かつての同盟者ドルベト部のダライ・タイシと戦ったことが知られる。ホー・オルロクは一万二千の軍を率い，息子のダイチンは一万の軍を率いたという[55]。

1640年，モンゴルのハルハ右翼のジャサクト・ハーンを盟主として，外モンゴル・ハルハの地でモンゴル・オイラット会議が開催された。1634年，モンゴルの大部分は，満洲族のハーンの臣下になった。長い間オイラットと敵対してきたモンゴルの，最後に残ったハルハ部は，東方の満洲族に脅威を覚え，西隣のオイラットと同盟を結ぶことにしたのであった。会議に参加した王公は，ハルハから十三名，オイラットから十五名で，この会議では，集団間にまたがる事件の処理法を規定した，ステップ固有の裁判規範と言える，モンゴル・オイラット法典が制定された。

法典の前文によると，ハルハの王公名に続いて，オイラットから参加した王公の筆頭はジューン・ガルのバートル・ホンタイジ，続いてホシュートのコンデレン・ウバシ，グーシ・ノミーン・ハーンの次に，トルグートのオルロクと，かれの息子たちシュクル・ダイチンとイェルデンの名が見える[56]。

1643－44年，オイラットは1635年以来の大規模なカザフ遠征をおこなった。指揮をしたのはジューン・ガル部長バートル・ホンタイジで，ホシュート部の故バイバガスの息子オチルトと異母弟アブライ，ホイト部長ソルトン・タイシ，バートル・ホンタイジの弟チョークル，ハルハの故ウバシ・ホンタイジの

53) RMO, dok.no.115.　屋敷　1981，15－17頁もこのことを指摘するが，彼のその他の推論には同意しかねる。
54) 宮脇　1991a，42－56頁。
55) Khodarkovsky 1988a, p.233.
56) 宮脇　1984，96－108頁。

孫エリンチン・ローザン・タイジなどが参加した。この遠征には，トルグート部長ホー・オルロクが派遣した部衆も参加していたということである[57]。

このカザフ遠征はオイラットの敗北に終わった。大きな損害を被って遠征から帰還したバートル・ホンタイジは，今回の遠征に参加せず，自分を裏切ったドルベトのダライ・タイシの遺子とホシュートのコンデレン・ウバシに対して，ともに戦うようにトルグート部のホー・オルロクに要請した。ジューン・ガルのバートル・ホンタイジの第一夫人ダラ・ウバサンチャは，ホー・オルロクの娘であった[58]。

ドルベト部のダライ・タイシの息子ダイチン・ホシューチは，1640年のモンゴル・オルラット会議にも出席し，トルグート部の王公に続いて法典に名が挙がっている。かれは兄弟とともにイシム河畔に居住し，父ダライ・タイシの死後，ホー・オルロクの娘である継母を娶っていた。1644年，ダイチン・ホシューチはトルグート部のシュクル・ダイチンに殺された。ホー・オルロクの娘は，自分の産んだ七歳になるダライ・タイシの末子ソロム・ツェレンを連れて，父ホー・オルロクのもとへ赴いた。ソロム・ツェレンが相続したドルベト部衆がヴォルガにやってきて，これがヴォルガ・ドルベトとなったのである[59]。

ジューン・ガルのバートル・ホンタイジは，ダライ・タイシの遺子たちと，これに味方したホシュート部の故バイバガスの次弟でグーシ・ハーンの兄コンデレンと戦った。バイバガスの息子アブライもコンデレンに味方し，トルグート部のオルロクを攻撃しようとした。

ここに，17世紀末あるいは18世紀初めにオイラット文字で最初に書かれた史料『ザヤ・パンディタ伝』がある。主人公であるチベット仏教の高僧ザヤ・パンディタは，1599年ホシュート部に生まれ，1615年四オイラットの指導者たちがみなチベット仏教に帰依した時，バイバガスの養子としてチベットに留学し，二十二年修業してラブジャンパの学位を得て，1639年にオイラットに戻った。かれは1662年に他界するまで，オイラット諸王公を施主として各地に巡錫して仏法を広めた。かれの高弟が毎年の事蹟を記録した『ザヤ・パンディタ伝』は，同時代の一級史料である[60]。

『ザヤ・パンディタ伝』によると，1646年春，コンデレン・ウバシがドルベトの二人のタイジを征伐したという。チチンケイの戦いと名づけられるこの内乱は，1647年にザヤ・パンディタ立会いのもと，調停と戦後処理がおこなわれたのであった。

ザヤ・パンディタは各地に布教したが，1645年にはトルグート部に招かれて法会を主宰した。捧物は，パンディタ自身の倉に一万の馬群，チャンゾトパ（会計係）に一千の馬群，大ラマたちに各自五百以上の馬群など，合わせて二万余の馬群であった。トルグート部族長となっていたシュクル・ダイチンは，チベットに巡礼に赴き，1647年ウラル河上流域の自分のウルスに戻った。その後1655年にも，ザヤ・パンディタがウラル河のダイチンのもとで冬を過ごしたことが記される[61]。

1653年，ジューン・ガルのバートル・ホンタイジが死んだ。かれの息子たちのうち，グーシ・ハーンの娘が産んだセンゲは，ホシュート部の故バイバガスの息子オチルトの孫娘アヌダラと結婚していた。センゲは異母兄たちを差し置いて父の跡を継いだが，ホンタイジを称することもないまま，1670年に異母兄たちに暗殺された。センゲの同母弟ガルダ

57）屋敷　1985，4－5頁。
58）同上，6頁。
59）Pallas, Part I, p.48.
60）宮脇　1986を参照。
61）同上，611，614頁。

ンは，僧侶となってチベットに十年間留学し，パンチェンラマ一世とダライラマ五世の弟子となっていた。ガルダンは兄の仇を討って1671年にジューン・ガル部族長となり，ダライラマ五世の認可を得てホンタイジと称した。

ホシュートのグーシ・ハーンの外孫ガルダン・ホンタイジは，オチルト・ハーン（1666年ハーン号をダライラマ五世から授けられた）の孫娘であるセンゲの未亡人を娶ったが，まもなくオチルトと衝突し，1676年かれを捕虜にした。オイラットの指導権を握ったガルダンに対して，ダライラマ五世は1678年に持教ボショクト・ハーン bsTan 'dzin Bo shog tu khang の称号を授けたのである。ガルダン・ハーンは，最初で最後のジューン・ガル部出身のハーンであった[62]。

ガルダンは，1679年から東トルキスタンの諸都市を次々と征服し，チャガタイの末裔のカシュガル・ハーンや，ホージャたちをイリに幽閉した。続いてカザフとキルギズを攻め，タシケント，サイラム両都市を占領した。1688年，ガルダンはハルハ部の内紛に乗じてモンゴルに侵入し，ハルハの王公の軍を破って，かれらを清朝麾下の内モンゴルに走らせた。この結果，ダヤン・ハーンの統一したモンゴルの後裔は，すべて清朝皇帝の臣下になった[63]。

ハルハを追って内モンゴルに侵入し，清軍に大損害を与えたガルダンに対して，清の康熙帝は親征を決意した。1696年，清軍は三路から外モンゴルに進攻した。ガルダン軍は今のウラーンバートル市の東方で清の西路軍と遭遇して大敗し，オチルトの孫娘である妻も戦死した。ガルダンの亡兄センゲの子ツェワン・ラブタンは，これより前に叔父に反旗を翻し，イリ地方と東トルキスタンを制圧していた。退路を断たれたガルダンはアルタイ山中をさまよったあげく，1697年に病死した[64]。

ガルダンにハーン号を授与したダライラマ五世は，すでに1682年に逝去していたが，摂政サンギェ・ギャンツォは十五年もの間これを隠し，密かにその転生者六世を選んでいた。サンギェ・ギャンツォはガルダンが清軍に破れた知らせを聞くと，1697年初め，トルグート部長のアユーキに六世の名でハーン号 Da'i ching A yo shi khang を授与したのであった。ジューン・ガルのツェワン・ラブタンは，1694年に五世の名でホンタイジ号 Er te ni jo rig thu hong tha'i ji を授かっていただけである[65]。

トルグート部のシュクル・ダイチンの子プンチュクは，ジューン・ガルのバートル・ホンタイジの娘と結婚し，アユーキを生んだ。アユーキの母は，センゲとガルダンの姉妹で，ホシュート部のグーシ・ハーンの娘の産んだ女であった。アユーキの娘セテルジャブはツェワン・ラブタンに嫁入った[66]。

このようにトルグート部とジューン・ガル部は何重にも婚姻を結び，同盟関係を強化していたが，これは遊牧騎馬民の常で，連合は，いつの時代でも，婚姻を結ぶことによって維持されたのである。

トルグート部のアユーキ・ハーンは，チンギス・ハーンの弟の男系子孫と伝えられるホシュート部のグーシ・ハーンの，娘の娘の子に過ぎなかった[67]。それにもかかわらず，アユーキ自身も，第四章の最初に述べた年代

62）宮脇　1991a，61頁。
63）宮脇淳子「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」『東洋学報』61－1.2，1979年，108－138頁。
64）岡田英弘『康熙帝の手紙』中公新書．1979年。
65）『ダライラマ五世伝』Vol. Cha (VI)，194b.『ダライラマ六世伝』157b. 宮脇　1991a，63，72－73頁。
66）Pallas, Part I, p.68.　『表傳』巻101，3b－4b。宮脇　1991a，73頁。
67）宮脇　1991a，64－65頁では，「アユーキ・ハーンの母がジューン・ガルのバートル・ホンタイジの娘であることは判明したが，その娘がグーシ・ハーンの娘の産んだ子であることを裏付ける史料は

記作者たちも，ダライラマ政権によるハーン号授与以来，トルグート部の王族がチンギス・ハーンと同姓であると主張するようになった。1710年にイスタンブールのオスマンの宮廷に遣わされたアユーキの使者は，次のように語ったという。

ロシア人がアユーキに，イシュテク人を攻撃するように要請してきたのを，アユーキはロシア人にこう言って，二度とも拒否した。「おまえたちはイシュテクのスルタンを殺したし，かれらはいまだにおまえたちに血の復讐の義務を負うている。私はかれらを止めるわけにはいかないし，止めるつもりもない。われわれは互いに了解し合っている。われわれはすべてチンギスの子孫であり，同じ一族の出身なのである」[68]

中央アジアで大勢力となったツェワン・ラブタンの率いるジューン・ガル部と，アユーキに率いられたトルグート部は，このようにして四オイラット連合の盟主を争うライヴァルとなった。ツェワン・ラブタンとアユーキのライヴァル関係については，別にジューン・ガル史をまとめる時に述べるつもりである。ここでは，17～18世紀のオイラットに「ジューン・ガル・ハーン国」が存在しなかったことだけを指摘して，先を急ぎたい。

第七章　トルグート部のイリ帰還

トルグート部最初のハーン，アユーキの時代は，ヴォルガ・トルグート部すなわちカルムィクの最盛期であった。清朝からの使節トゥリシェン（Tulišen 図理琛）は，1714年アユーキ・ハーンと会見し，帰国して『異域録』を著した。その他さまざまな言語で書かれた史料が存するが，アユーキの時代のトルグート史は，前述の如く別稿に譲る。

1724年にアユーキが死ぬと，かれの子孫の間で例のごとく後継者争いが起こった。アユーキの生前にも，すでにドルベト部族長やアユーキ自身の息子たちの離反など，遊牧首長間の争いは起こっていたが，今回はロシア当局が一方に肩入れしたために，ヴォルガ・トルグートの分裂は決定的になった。ロシア当局は，アユーキ自身が最後に後継者として選んだ，かれの若い息子ツェレン・ドンドクを支援し，1731年かれにハーン号を授けた。このため，アユーキの孫である，グンジャブの子ドンドク・オンボはこれを攻め破り，配下を引き連れてクバンに去った。ヴォルガ・ステップには，実力なきハーンと弱体化したカルムィクが残った[69]。

1735年から再開されたロシア・トルコ戦争に，カルムィクの軍事力を必要としたロシア当局は，ドンドク・オンボに帰参を呼びかけた。これに応じたドンドク・オンボはヴォルガ・ステップに戻り，カルムィクのハーン位を授与され，戦争において武功を建てた。1741年にドンドク・オンボが死ぬと，かれの従兄弟で，アユーキの長子チャクドルジャブの子ドンドク・ダシがハーン位を継いだ。1761年にはかれの息子ウバシがその後継者となった。かれらの時代には，もはやロシアにとってカルムィクの軍事的価値は減退していた[70]。

この頃ロシア南東辺疆守備には，コサック（カザーク）が当たるようになっていた。ヴォルガ，ウラル沿岸やオレンブルグにいるカ

今のところない」ただ，傍証により，「アユーキの母がセンゲとガルダンの同母姉妹であったことは，ほとんど疑問の余地はない」とした。ところが今回，『表傳』巻101，4b（IU，巻101，7a）に，「ガルダン G'aldan はアユーキ Ayuki の舅氏 nakcu である」とあるのを発見した。漢語の「舅氏」と満洲語の「nakcu」はどちらも「母の兄弟」の意味であるから，アユーキの母がグーシ・ハーンの娘の娘であったことは，証明された。

68）Khodarkovsky 1988b, p.16.（*Nāme-Hūmayun*, No.6, p.201, *Bashbakanlik Arshivi*, Istanbul.）

69）Bakunin, op.cit, pp.239–40, 253.　中村，10頁。　Halkovic, pp.53–56.

70）中村，11頁。　Halkovic, pp.56–68.

ルムィク人の中で，コサックに編入されて軍務に服する者が目だつようになる。

オイラット諸部は，17世紀初めからチベット仏教の信者となり，ヴォルガ河畔に移住したカルムィクも熱心な仏教徒であった。しかし18世紀になると，キリスト教に改宗する者も現れた。1737年，キリスト教化したカルムィクの居住地がヴォルガ沿岸のサマラ上流に設けられ，1739年にスタヴロポリと命名された。1744年に3330名に達していた彼らカルムィクのキリスト教徒は，オレンブルグ県知事の管轄下に入った。スタヴロポリのカルムィクは，のち1840年代にオレンブルグ及びウラルの両コサック軍団（後者はヤイク・コサック軍団の後身）に吸収合併された。

このように，カルムィクの一部はロシア政府の統制下に入っていく一方，大部分のカルムィクが遊牧するヴォルガ・ステップには，ロシア人農民が入植するようになった。とりわけ1760年代初めから，サマラからツァリツィンにかけてのヴォルガ東岸への入植が進んだ結果，1765年と66年には，カルムィクの長ウバシがアストラハン県知事に対し，ロシア人入植者の増大により，カルムィクの遊牧が危機に瀕していると訴えるまでになった[71]。

一方，カルムィクのライヴァルであったジューン・ガル部の方では，ツェワン・ラブタンの息子ガルダン・ツェリンが1745年に死んだ後，やはり相続争いが起こった。この機を利用した清朝は1755年に大軍を送り，ジューン・ガルの最後のホンタイジを捕らえて北京に送った。こうして中央アジアを制覇したジューン・ガルは滅び，清軍による虐殺と，かれらのもたらした天然痘の流行によって，イリのオイラット人口は激減した。

1756年，四半世紀ぶりのヴォルガ・トルグートからの使節が，ロシア領を通って三年経て清朝に着いた。トルグート・ハーン・ドンドク・ダシが遣わしたこの使者を，乾隆帝は萬樹園で恩宴を設け，チベットに護送した。翌年チベットからもどった使者は，乾隆帝の下問に答えて，トルグートやカザフに関する情報を提供し，帝からドンドク・ダシへの贈物を賜って帰って行った[72]。

ロシア暦1771年１月５日（陰暦11月），ウバシは配下の三万三千家族を引き連れて，ヴォルガを出発し，カザフ草原を過ぎてバルハシ湖砂漠を遠回りし，七個月後にイリの故地に到って，清の乾隆帝の保護を求めた。ヴォルガ河畔には一万数千家族が残った[73]。

トルグートのロシアからの逃避行については，わが国では主としてスウェン・ヘディン著『熱河』の中の「土爾扈特の遍歴」によって知られるのみである[74]。この物語は「トルグートの死のアジア横断移動」を，あまりに悲劇的に脚色し過ぎている。出発当時七万家族四十万人の老若男女が，ロシア軍やキルギズ人，バシキル人などの襲い来る敵と戦って，１月末には既に死者七万に達し，五個月過ぎた時には死者二十五万，牛も羊も山羊も一頭も残っていなかったという。ヘディンの利用した文献は，史実としての信憑性に乏しい。いずれこの問題も解明したい。

三万三千家族十六万九千人余という数は，清の乾隆帝が自ら著した『御製優恤土爾扈特部衆記』中に見える数字である。この記述に続いて「イリに到るまでやっと一半が残った」あるいは「七万余の輩の凍え飢え疲れ窮まった様子を，時ごとに目に見えるように心が傷む」[75]と乾隆帝は記すので，トルグート部の七個月に及ぶ旅程の間，十万人近くが，死亡するかあるいは行軍から脱落した可能性

71）中村，12頁。
72）『表傳』巻101，8b－9b. IU，巻101，16a－18b.
73）Halkovic, pp.69−76.　中村，12－13頁。
74）スヴェン・ヘディン著・黒川武敏訳『熱河』，地平社，1943年，55－99頁。
75）『表傳』巻101，18b. IU. 巻101，37a－38a.

があるとのみ，ここでは指摘しておく。

乾隆帝は，オイラットの一部族トルグート部が，ロシアを離れて自発的に清朝に帰属したことを，ことのほか喜んだ。帝は自ら『御製土爾扈特全部帰順詩』『御製土爾扈特全部帰順記』『御製優恤土爾扈特部衆記』を著したのみならず，トルグート部のイリ帰還から八年後の1779年，旨を下して『欽定外藩蒙古回部王公表傳』の纂修を命じた。上記の御製三篇は，この『表傳』巻一百一「土爾扈特部総伝」中に全文が掲載されている。

乾隆帝の気持ちをよく表す『帰順詩』を，満洲文からの翻訳によって以下に引用する。この詩は四行ずつ頭韻を合わせており，五言の形式を採る漢文に較べて委曲を尽くしている[76]。

このトルグート部というもの，
これらの先のハンはアユキであった，
ここに至ってウバシはオロスに背いて，
エジルの地から降って来た。
全く撫で降らせなかったのに化に向かったのである，
重い恩を及ぼし総て慈しむべきである，
逃げたシェレンが改めて求め来たのにより，
即ちオロスといったとて何を言いがかりとしよう。
オイラトらは互いに不和なので，
以前に戸口を率いてオロスに頼って行った，
虐待に耐えきれず故地を想い，
オロスを捨てて降って来た。
これらを受け入れなければ賊になる恐れがあると思う，
安らかにするので皆我が民となっている，
これから先はあらゆるモンゴル諸部は，
一つとして臣僕にならないものはなくなる。

ここで「臣僕」と訳した満洲語の aha は，直訳すれば「奴隷」であるが，一家の主人 ejen に対して，それに仕える家来の意味である。モンゴル諸部は，清朝皇帝にとっては一般の漢人のような「民」ではなく，私的な「臣」であった。漢文の方では「王臣」とする。

上記の『帰順詩』に続く『表傳』の記事によると，乾隆帝はムラン（木蘭）に行幸の途中，張家口（伊綿峪）に泊った。そこへウバシらが到着すると，移動宮殿（行幄）に招き入れて謁見を賜い，帝はモンゴル語で親しく下問し，御恩を感戴する真心を申し述べさせ，礼服を賞賜し，彼らが着ていたフェルトの衣服を着替えさせた。帝は熱河の避暑宮殿にもどった後，萬樹園と溥仁寺で恩宴を設け，夕刻には命じて種々の灯篭をともして花火を見せ，銀，種々の絹織物などの珍奇な品々を，トルグート人それぞれに賞賜したのであった[77]。

乾隆帝は詔を発し，トルグート部を新旧二部に分け，それぞれジャサク（旗長）を設けた。ウネン・スジュクト（真の信仰あるもの）と名付けた旧トルグートをウバシに管轄させ，他のモンゴル諸部の例に倣って彼をハンとした。以下の王公をそれぞれ，親王，郡王，ベイレ（貝勒），ベイセ（貝子），公，一等タイジ（台吉）に封じた。トルグート部の王公ではあるが，ジューン・ガルとともに遊牧し，清軍がイリを攻めた時ロシアに逃げて，ヴォルガ・トルグートに合流していたシェレンも，ウバシとともに降ってきた。帝は彼を郡王に封じ，チン・セトキルト（真の心を持つもの）と名付けた新トルグートを管轄させた。清朝領内にはこれら以外にも，すでにエ

76) IU，巻101，23b－24b．満漢両文の満文と漢文の相違を知る好例であるので，ここに漢文を引用する。『表傳』巻101，12a.
詩曰，土爾扈特部，昔汗阿玉奇，今来渥巴錫，明背俄羅斯。向化非招致，頒恩應博施，舍稜逃復返，彼亦合無辭。衛拉特相忌，携孥往海濱，終焉懐故土，遂爾棄殊倫。弗受将為盗，俾安皆我民，從今蒙古類，無一不王臣。

77) 『表傳』巻101，12b－13a．IU，巻101，24b－26a.

ジネと青海にトルグート部の一部が住んでいたのである。

乾隆帝は，尊敬する祖父康熙帝の果たせなかった，全モンゴルの帰順という偉業を成し遂げたことに，大いに満足した。トルグート部のイリ帰還は，詩文好みの乾隆帝お気に入りの題材であり，数字まで詳しく記録していることは，先に見た通りである。本章を終えるに当たって，特に興味深い『帰順記』の一節を，満洲語から訳出する[78]。

「この山荘（避暑宮殿）というものは，わが皇祖（康熙帝）が建てた，遠くの人を撫するところである。ここでチェリンらに宴を賜い賞賜した後，すぐに西域を平定した。今それから何年も経たないのに，再び意外にも，招き寄せもしなかったのにトルグートの全部族が自発的に従って来るという事態に出会った。これからはもろもろのモンゴル人たちの同類は悉くわが大清国の臣となって，［皇祖が］不思議にもお見通しだったことに甚だ近い」

おわりに——今後の展望

トルグート部族の歴史は，わが国ではこれまで断片的に言及されるのみで，通史として取り上げられることはなかった。一遊牧部族としてのトルグートを総合的に理解するために，本論ではモンゴル帝国の仕組みから説き起こしたので，17～18世紀のトルグートについては概説に留まったが，トルグート史の全体像はここに初めて明らかになったと信ずる。

本論で見てきたように，中央ユーラシアの遊牧王権の研究は，従来の「東洋史」や「西洋史」の枠組みを保ったままでは，解明できない分野である。さらに，19世紀の言語学の分類に盲従して，民族を「モンゴル系」か「トルコ系」かに峻別し，その一方のみを対象として他方を除外することも，研究の進展を阻害するものである。これは今回トルグート通史の叙述を試みてあらためて認識した，筆者自らの自戒でもある。われわれの研究対象である遊牧民は，いずれの時代においても，さような枠組みとは無縁の生活を送っていたのである。

1630年にヴォルガ河畔に「移住した」と言われるトルグート部長ホー・オルロクは，その後もシベリアの河川上流域にも遊牧し続けた。トルグート部がジューン・ガル部の圧迫を受けてヴォルガに移住したというのは，事実ではなかったのであるが，後世このように言われるようになったのには，理由がある。1771年トルグート部が満洲皇帝の臣下となった後，乾隆帝に問われて，「バートル・ホンタイジがオイラット諸部を圧迫するので，ホー・オルロクが族人を率いてロシアに行ったのである」とかれら自身が返答し，あるいは乾隆帝自らが文献を調べて，「アユーキ・ハーンがツェワン・ラブタンと不和になってロシアに逃げたようだ」と推断したのがその根拠となった[79]。

ジューン・ガルの仇敵であった満洲皇帝の家臣となったのであるから，トルグート部の王公が，自分たちはジューン・ガル部と常に敵対していたと弁明するのは当然であろう。かかる事後の説明をもって史実と見なすべきではない。

17～18世紀の遊牧王権の研究は，今後，進展が大いに期待できる分野である。本論が説き及んだのはその一端に過ぎないが，史料の質，量，種類の豊富は見られる通りである。

今回は詳論を避けたが，遊牧王権の維持に

78) IU，巻101，32b－33a．比較のため漢文を引用する。『表傳』巻101，16ab.
夫此山荘，乃我皇祖所建，以柔遠人之地。而宴賚車凌等之後，遂平定西域。茲不數年間，又於無意中，不因招致，而有土爾扈特全部歸順之事。自斯凡屬蒙古之族，無不為我大清國之臣，神御咫尺。有不以操先券，閲後成，愜志而愉快者乎。

79) 『表傳』巻101，2ab，8b－9a．IU，巻101，3b，29a.

とって非常に重要な要素を占めたのが，他部族の有力な首長との婚姻関係であった。トルグート部長の一族は，四オイラット部族連合に属する集団とだけ婚姻を結んだのではなかった。例えば，トルグート部長ホー・オルロクは，自分の娘の一人を，ドン・コサックのイェルマックに1581－83年に「征服」された「シビル・ハーン国」のクチュム・ハーンの息子イシムに妻あわせていた。また，トルグート部長プンチュクは，1640年のモンゴル・オイラット会議で同盟関係に入ったハルハ部のメルゲン・ハーンに，自分の娘，すなわちアユーキの姉を妻あわせたのであった。

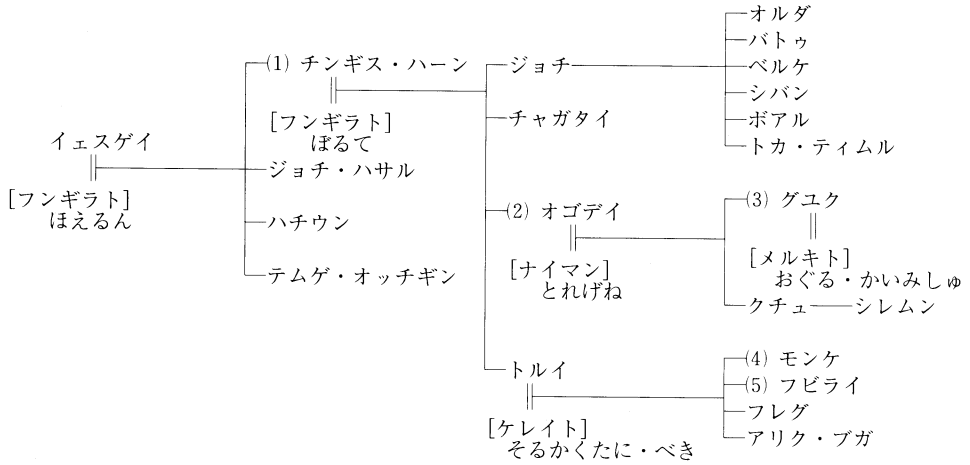
［付記］　筆者はモンゴル語・オイラット語文献の読解については，かねてより岡田英弘教授の指導を受けてきた。今回，本論で利用した満洲語文献についても，同教授の指導を受けることができた。特に記して謝意を表する。

参考文献略語表

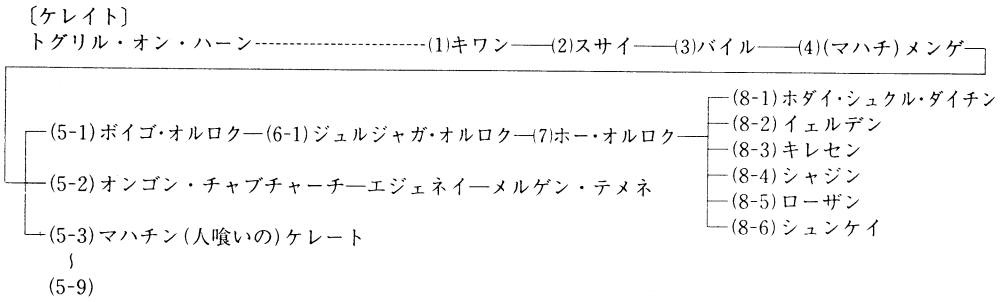
岡田　1966：岡田英弘「ダヤン・ハガンの先世」『史学雑誌』75－8，1－38頁。
岡田　1968：岡田英弘「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」『遊牧社会史探求』32（『内陸アジア史論集』2，国書刊行会，1979年，87－102頁再録）。
岡田　1974：岡田英弘「ドルベン・オイラトの起源」『史学雑誌』83－6，1－43頁。
ドーソン：ドーソン著・佐口透訳注『モンゴル帝国史2』平凡社（東洋文庫），1968年。
中村：中村仁志「ロシア国家とカルムィク（一七—一八世紀）」『ロシア史研究』42，1986年，2－17頁。
宮脇　1981：宮脇淳子「十七世紀のオイラット——『ジューン・ガル・ハーン国』に対する疑問——」『史学雑誌』90－10，40－63頁。
宮脇　1983：宮脇淳子「モンゴル＝オイラット関係史——十三世紀から十七世紀まで——」『アジア・アフリカ言語文化研究』25，150－193頁。
宮脇　1984：宮脇淳子「ガルダン以前のオイラット——若松説再批判——」『東洋学報』65－1.2，91－120頁。
宮脇　1986：宮脇淳子「オイラットの高層ザヤ＝パンディタの伝記」，山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社，603－627頁。
宮脇　1990：宮脇淳子「モンゴル系民族」，護雅夫・岡田英弘編『中央ユーラシアの世界』（山川出版社『民族の世界史　4』），271－394頁。
宮脇　1991a：宮脇淳子「オイラット・ハーンの誕生」『史学雑誌』100－1，36－73頁。
宮脇　1991b：宮脇淳子『祁韻士纂修『欽定外藩蒙古回部王公表傳』考」『東方学』81，102－115頁。
屋敷　1981：屋敷健一「バートゥル・フンタイジの登場—ジューン・ガル王国勃興史に関する一考察—」『史朋』13，1－25頁。
屋敷　1985：屋敷健一「1640年代のオイラト」『史朋』18，1－25頁。
DOT: Emči Γabang šes rab, *Dörbön Oyirodiyin töüke*, Corpus Scriptorum Mongolorum, Tomus V, Fasc. 2–3, Ulanbator, 1967, pp. 74–100.
ET: Saγang Secen, *Erdeni-yin tobci* (*'Precious Summary'*), *A Mongolian Chronicle of 1662*, Faculty of Asian Studies Monographs: New Series, No.15, The Australian National University, 1990.
Halkovic: Stephen A. Halkovic, Jr, *The Mongols of the West*, Indiana University Uralic and Altaic Series, Vol. 148, Bloomington, 1985.
IU: *Hesei toktobuha tulergi Monggo Hoise aiman-i wang gung sai iletun ulabun*（『欽定外藩蒙古回部王公表傳』満文本）
Khodarkovsky 1988a: Michael Khodarkovsky, "The Arrival of the Kalmyks and the Muscovite Southern Frontier 1600–1670," *Russian History*, 15, Nos. 2–4, pp. 225–254.
Khodarkovsky 1988b: Michael Khodarkovsky, "Uneasy Alliance: Peter the Great and Ayuki Khan," *Central Asian Survey*, Vol. 7, No. 4, pp. 1–45.
Pallas: P.S. Pallas, *Sammlungen historischer Nachrichten über die mongolischen Völkerschaften*, St. Petersburg, 1776–1801.

RMO: *Materialy po istorii Russko-mongol'skie otnosheniia* 1607−1636, Moskva, 1959.
XXT: Xalimaq xādiyin tuužiyigi xurāži bičiqsen tobči orošibai (Pozdneyev, *Kalmytskaya Khrestomatiya*, pp. 1−23), Petrograd, 1915.

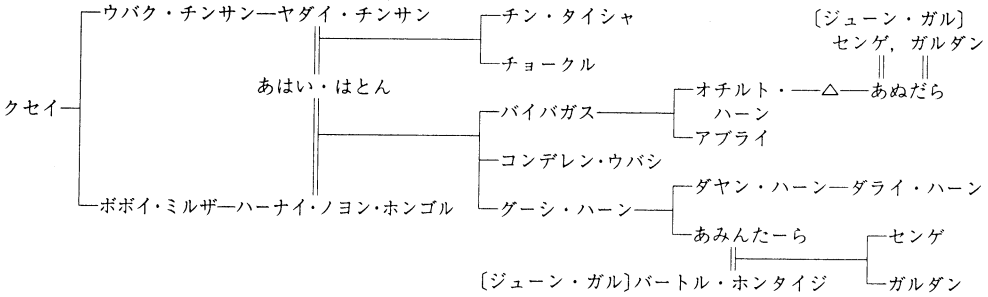
（系図1） モンゴル帝国



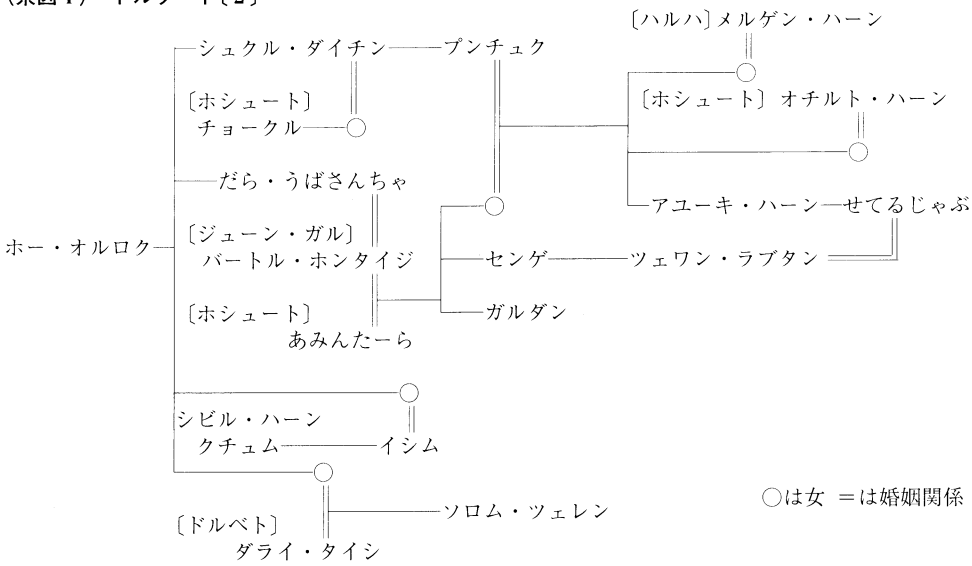
（系図2） トルグート〔1〕



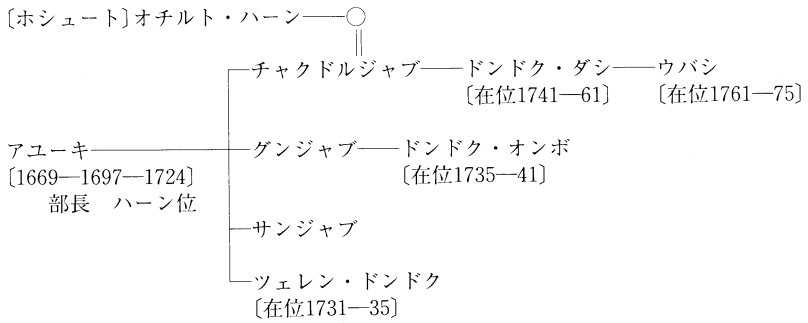
（系図3） ホシュート

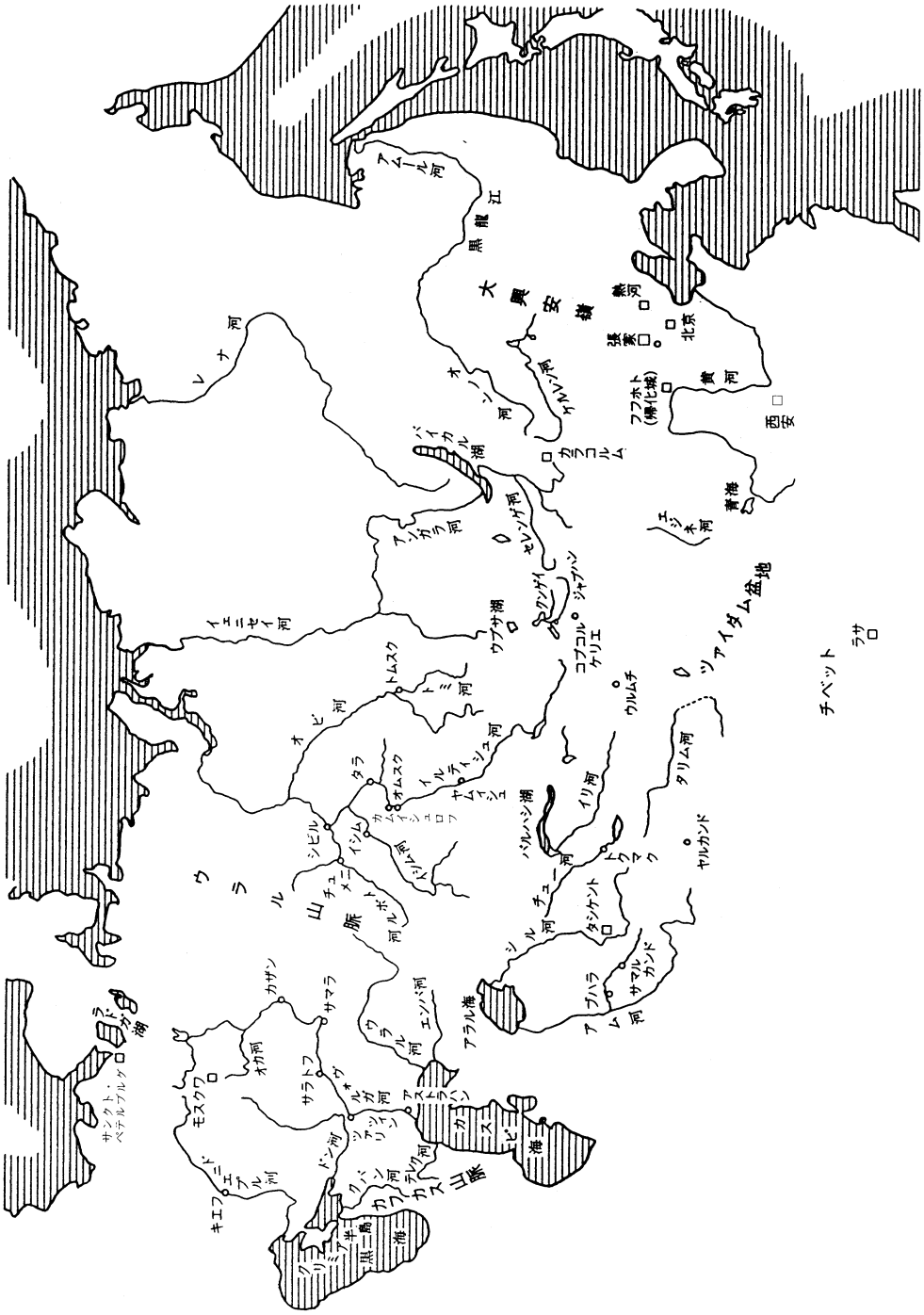


(系図4)　トルグート〔2〕



(系図5)　トルグート〔3〕




アムール河
黒龍江
大興安嶺
瀋陽
張家口
北京
レナ河
オノン河
ケルルン河
フフホト(帰化城)
黄河
西安
バイカル湖
カラコルム
青海
イェニセイ河
アンガラ河
セレンゲ河
ジャブハン
ツァイダム盆地
ウブサ湖
コブコル
ケリエ
ウルムチ
チベット
ラサ
トムスク
トミ河
オビ河
タラ
オムスク
イルティシュ河
ヤムイシュロフ
カムイシュロフ
イシム
シビル
チュメニ
トボル河
ウラル山脈
バルハシ湖
イリ河
タリム河
ヤルカンド
トクマク
ダシケント
シル河
アムダリヤ河
サマルカンド
ブハラ
アラル海
ウラル河
エンバ河
カザン
サマラ
オカ河
モスクワ
サラトフ
ヴォルガ河
アストラハン
カスピ海
ドン河
ジャリン
ドニエプル河
カフカス山脈
クバン河
クリミア半島
黒海
キエフ
ドニエプル河
サンクト・ペテルブルク
ラドガ湖